



芝

歳の時記



港区芝地区総合支所協働推進課
芝会議 まちの魅力発掘部会 芝の語り部

「芝の歳時記」の刊行にあたって

港区芝地区総合支所長 新井 樹夫

芝地区には、芝公園や自然の山では23区最高峰となる愛宕山、都内最大の丸山古墳、増上寺や東京タワーをはじめとする多くの文化・歴史的資源があります。

また、芝地区は港区で昼間人口が最も多く、働いている人や観光客などでにぎわうとともに、虎ノ門、浜松町、竹芝などの地域で新たなまちづくりが進められている、活気あふれる地区でもあります。

このたび、芝地区の魅力を多くの方に知っていただくため、芝地区総合支所と「芝会議 まちの魅力発掘部会 芝の語り部」との協働により、『芝の歳時記』を刊行しました。芝地区では、江戸時代以前から現在まで続いている多様な行事があり、その一方で残念ながら途絶えてしまった行事、一度は途絶えた後に復活した行事もあります。多くの年中行事は、江戸時代の人々にとって、季節を感じる楽しい行事でした。

本冊子を通じて芝地区の歴史と伝統の一端に触れ、より一層、芝地区の魅力を感じ、芝のまちを楽しんでいただければと思います。芝地区総合支所では、今後も地域の皆さんと一緒に、芝地区の魅力を発掘・創出し、多くの方に発信してまいります。

本冊子の作成に当たり、ご尽力をいただきました芝の語り部の皆さん、取材等にご協力をいただきました皆さんに厚く御礼申し上げます。

魅力あふれる芝地区

芝会議 まちの魅力発掘部会 リーダー 増田 由明

「まちの魅力発掘部会芝の語り部」は、歴史・史跡ツアー及び歴史講座等を開催し、区民の皆様に芝地域を中心とした魅力を発信しております。

この活動を通じて、「江戸時代の人々が四季おりおりの年中行事をどう受けとめて、どう暮らしていたのか」に興味を抱きました。

これらの年中行事がなぜ執^とり行われていたのかを調べてみると、そこには歴史、文化、民俗、信仰などが深く関わっていることがわかり、それが「芝の歳時記」を作るきっかけとなりました。

南北に細長く伸びた日本列島は、四季の変化に富んでおり、先人は季節の移ろいを感じながら、それに寄り添って暮らしてきたと思われまます。

その中には、「ひな祭り」や「端午の節句」のように子どもの健やかな成長を願う行事もあります。

また、「お彼岸」や「お盆」などのような年中行事がなぜ行われているのか、その由来さえ知らなかったものもありました。

そこには、祖先に感謝して、その伝承を後世に伝えていくべき季節の風物詩があるのではないかと思います。

江戸っ子は「宵越しの金は持たぬ」という気前の良さがありましたが、貧しいが、心豊かにゆったりと過ぎゆく日々を楽しんでいた様子が浮世絵等からも窺えます。

私たちは寺社の祭礼及び昔から伝わってきた行事の由来を知り、興味を持ってその行事に参加することで、江戸の人々の暮らしを感じることができるのではないかと思います。

そして、地域の人々や自然と触れ合うことにより、心の交流や季節の香りをより一層感ずることになると思います。

この「芝の歳時記」には、江戸時代などから現在まで続いている祭礼、行事を取り上げています。また、諸事情で中止された行事も浮世絵、錦絵や東都歳事記などに数多く残されており、それらも取り上げました。

この「芝の歳時記」を読まれた方が、これをきっかけに区内で行われている各種行事に参加することで、地域とのつながりが広がることを願っています。

結びに、本書を作成するにあたり、芝地区内の神社、寺院のご協力、そして情報をお寄せくださいました多くの皆様にお礼を申し上げます。

目 次

正月 元日・元旦・初日の出・初詣 1月1日	1
正月遊び 1月1日～	4
強飯式 愛宕神社 1月3日(旧暦)	7
はしご乗り 1月4日	9
人日の節句 七草 1月7日	12
初こんぴら祭 1月10日	14
初寅 その年最初の寅の日	16
七福神めぐり 1月1日～成人の日	18
成人式 1月第2月曜日	20
釜鳴神事 御田八幡神社 1月15日、5月15日	22
藪入り・閻魔参り 1月16日、7月16日	23
節分 2月3日	25
初午 2月最初の午の日	27
上巳の節句 ひな祭り 3月3日	29
お彼岸 3月春分の日、9月秋分の日	31
花見 4月上旬	33
御忌大会 増上寺 4月2日～7日	35
灌仏会(花まつり) 4月8日	37
烏森神社 例大祭 5月3日～5日	38
端午の節句 子どもの日 5月5日	40
日比谷神社 例大祭 5月第2週の金、土、日曜日	42
御穂鹿嶋神社 例大祭 6月10日に近い土、日曜日	44
千日詣り ほおづき縁日 愛宕神社 6月23日、24日	46
夏越の祓 6月晦日	47
七夕 7月7日	49
御田八幡神社 大祭 8月第1週	51
西久保八幡神社 神幸祭 例大祭 8月中旬	53
幸稻荷神社 例大祭 8月14日、15日	55
お盆 8月15日(旧暦7月15日)	57
盆踊り 8月	59
二十六夜待ち 8月下旬(旧暦7月26日)	61

三田春日神社 例大祭 9月9日に近い金、土、日曜日	63
重陽の節句 9月9日	65
元神明宮（天祖神社） 例大祭 9月16日前後	66
だらだら祭 芝大神宮 9月11日～21日	68
月見 9月中旬（旧暦8月15日）	71
出世の石段祭（隔年） 愛宕神社 9月22日～24日	73
大祭式（金刀比羅宮） 10月10日	75
七五三 11月15日	76
紅葉狩り 11月下旬～12月上旬	78
歳の市 12月後半	80
年越の祓 12月晦日	82
除夜の鐘 12月31日	83
参考文献	84

正月 元日・元旦・初日の出・初詣

1月1日

江戸時代、大名および格式の高い武家は、元日より三日の間に江戸城に初登城して、将軍へ年始の挨拶をせねばならず極めて多忙であった。

一方、商家では、除夜の鐘が撞かれている「子の刻（23時～1時）」までは掛け取り（売掛金の回収）に廻ったり、正月の準備で忙しかった。そのため、元旦は江戸を下ろしてゆっくり休んだ。また、町民の多くは寝正月を決めこんだ^{注1}。

●正月

正月とは、旧年が無事に終わったことと新年を祝う行事である。

1月がなぜ正月と呼ばれるかは未だに定説がない。1月は秦の始皇帝の誕生月であり、その月を「政月」セイグワツと呼んでいたが、後に正月と略されシャウグワツになったという説が有力である。

●元日・元旦

元旦は一年の始まりとして年神様^{としがみ}^{注2}を迎えて、旧年の豊作と平穏に感謝し、併せて本年の豊穰と平和を祈願する。元は「はじめ」、旦は「日の出、朝」の意味である。「年」「月」「日」のはじめを「三元」といい、元日の朝を元旦という。なお、元日は1月1日の丸一日をいう。

●初日の出

初日の出は、その年の最初に昇ってくる太陽（ご来光）である。人々は初日の出に願い事やその年の決意を祈る。元日の早朝に、宮中で天皇が行う「四方拝」が起源とされ、江戸時代に庶民へ広まったが、一般的な年中行事となったのは明治時代以降といわれている。

『江戸府内絵本風俗往来』によると、初日の出の名所として「高輪芝浦 愛宕山 神田湯島の両台等 海上見晴せる場所には元旦の東雲告渡ると共に近傍の人相集りて初日影を拝す」とあるが、現在では東京タワーの展望台や芝浦埠頭などへと変わっている。



レインボーブリッジ近くから見た初日の出

● 初詣

初詣はつもうでは年が明けて初めて寺社さんけいに参詣することで、旧年の平穩に感謝を捧げて新年の無事と平和を祈願した。

江戸時代まで初詣は、元日の恵方詣えほうまいり^{注3}や氏神様うじがみさまの初縁日などの参詣であった。しかし、明治時代になり、正月三が日の休み（江戸時代は元日のみ）が定着して鉄道網が発達すると、縁日や方角にこだわらずに、行楽も兼ねて郊外の寺社への初詣が盛んになった。



増上寺 初詣

明治時代の三田聖坂の正月風景を描いた絵がある。



東京名所図会

① 三河萬歳

江戸の萬歳は三河萬歳みかわまんざいと呼ばれ、中啓ちゅうけい^{注4}を持って舞う「太夫」たゆうと鼓つづみ^{注5}を打つ「才蔵」さいぞうの二人一組で、武家屋敷や庶民の家を訪れて目出度めでたい謡うたいをうたった。現在の漫才のルーツでもある。この絵には、若い娘相手に面白おかしく新春の祝い事を述べて、祝儀を貰う門付けかどづを行っている門萬歳が描かれている。

② 猿まわし

江戸時代には厩うまやのある大名屋敷や旗本屋敷でお祓はらいをして、ご祝儀を貰っていた。猿は馬の健康や無事を守るといわれ、日光東照宮の神厩舎しんきゅうしゃには、「見ざる」「聞かざる」「言わざる」の三猿の彫刻が彫られている。

③ 獅子舞

7世紀初めに中国の唐王朝から仏教ぎがくの伎楽とともに獅子舞が伝わり、その後16世紀初めに伊勢国（三重県）で飢饉ききんや疫病除けえきびょうに獅子頭を作って正月に舞うようになった。その後に江戸に伝わり、悪魔を払って穏やかな一年を願う縁起物として定着した。

④ 角兵衛獅子

7歳から15歳くらいの子どもが縞模様しまもようのもんぺと小さい獅子頭を頭上に頂いた格好で踊る。はじめは笛や太鼓に合わせて演技をしていたが、後には獅子児ししこが胸につけた羯鼓かっこ（小さな鼓）を打ちながら逆立ちやとんぼ返りの曲芸を見せるようになった。新潟市を発祥とする郷土芸能であるため、関西では越後獅子と呼ばれる。

⑤ 亀塚稲荷

絵の左上には、火の見櫓やぐらとその左に亀塚稲荷が描かれている。

私たちは正月の伝統行事を楽しんでいるが、その由来を知れば改めて新鮮に感じられるだろう。

注1：正月は働いてはならぬ日とされ、特に掃除については「お迎えした年神様を掃き出すこと」になり、福が逃げるといわれた。「朝起き貧乏 寝福の神」（正月の早起きは貧乏のもとで、朝寝坊は幸福のもとである）との言い伝えもある。

注2：年神様は作神（農業の神様）としての性格もあり、毎年正月に各家にやって来る来訪神。歳神様、としとくじん、歳徳神ともいう。正月の飾り物、門松は年神様を迎えるためのものであり、鏡餅は年神様への供え物。

注3：年神様が来訪してくる方角で「明るき方、明きの方」ともいい、毎年方角が異なる。その方角はその年の干支えとに基づいて定められ、その吉方きっぽうに当たる神社に詣でて、一年の福を祈るのが恵方詣。

注4：舞に使う扇。扇は「末広がり」ともいい、縁起の良いものとされた。

注5：「つずみ」とも書く。歌舞伎や浄瑠璃じょうるりの題名に「鼓」がある場合は「つずみ」と読み仮名を振る場合が多い。

この歳時記では「上巳の節句（雛祭り）」「端午の節句」^{たんご}「七五三」などの子どもが主役の年中行事を取り上げている。歓声を上げながら、無心で遊んでいる子どもたちの姿は正月を代表する風景ともいえる。

無邪気な子どもの正月の遊びにも、日本の伝統や歴史の背景がある。



江戸勝景中洲より三つまた永代ばしを見る図 歌川国芳 天保の頃

① 凧あげ

伝説では、古代中国の魯の哀公時代（紀元前 494 ～ 紀元前 468）の人、魯班^{ろはん}によって作られた凧¹が最初といわれている。しかし、その利用目的は通信、測量などの軍事目的で、無邪気な子どもの遊びとはかけ離れたものであったという。

日本では、平安時代中期に編纂された辞書『和名類聚抄』に「紙老鳶^{しろし}」として記述がある。もともとは男子の誕生を祝って揚げる縁起のものであったが、江戸時代以降は子どもたちの遊びに変わっていった。なお、江戸時代初期には大人が夢中になりすぎ弊害²が出たので、明暦元年（1655）、幕府によって禁止令が出された。

なお、当時、凧は「イカ」と呼ばれ、前述の禁止令も「イカノボリ」と書かれていた³。大空に舞う凧が、運勢や名前が上がることを連想させるので正月の遊びとなった。

② 羽子板

中国から伝わったといわれ、室町時代の『下学集』^{かがく}（1444 年刊）に「正月に羽子板を用いた」との記載がある。室町時代より前には、羽子板は



無患子の実

胡鬼板、羽根は胡鬼子とも呼ばれ、蚊を食べる蜻蛉に見立てた胡鬼子を打つことにより子どもの無病息災を祈願した^{注4}。

羽子板の羽根には「子に患いが無い」と書く無患子の実が使われている。これを打つことで、無病息災を祈願して厄除けをすることになる。また、負けると顔に墨を塗るのも、魔除けの1つといわれる。このような縁起をもつため、正月の遊びとなった。

③ 独楽回し



中国発祥で、朝鮮の高麗を通じ、平安時代までには日本に伝わったといわれる。高麗は「こま」と呼ばれ、これが独楽の名前の由来となった。当初は縁日の見世物として独楽回しが行われたが、それが普及し子どもの玩具となった。その普及の背景には、精緻に作られてよく回る独楽の開発があり、当時から日本の木工技術のレベルの高さがうかがい知れる。

独楽回しが正月の遊びになったのは「金が回る」「物事が円滑に回る」を連想させることや、一本立ちして一人前になることを祈願したからといわれる。

④ まりつき

蹴鞠の起源は古代中国であり、日本に伝わったのは奈良時代といわれている。まりは蹴鞠から派生したものであり、江戸時代になって女の子の遊びとして定着した。なお、まりつきは他の正月遊びとは異なり、その縁起などに定説がなく、正月以外でも遊ばれた。



⑤ 双六



当初は、1対1で競うサイコロを使ったゲーム^{注5}であった。江戸時代中期頃から印刷技術の進歩、伊勢参りの流行により、振ったサイコロの数だけコマを進める道中双六などの絵双六が流行した。ただし、大人たちが絵双六を賭け事に使ったことから、天保の改革で禁止令が出る。正月に行われるのは、双六でその年の運勢を占ったからといわれる。

⑥ 福笑い

おかめやお多福の福顔の輪郭が描かれた紙に、切り抜いた眉、目、鼻、口などを並べて顔をつくる。位置がずれて出来た滑稽な表情を皆で笑う。正月に行われるのは「笑う門には福来る」という諺があるように、皆の笑いを誘って、福がくることを祈願したからといわれる。



⑦ かるた

読み札と絵札の2種類の札を使う遊び。百人一首の上の句と下の句を合わせる「百人一首かるた」や、いろは歌を用いた「いろはかるた」が有名。特に近江神宮で行われる百人一首の競技会は漫画や映画になったり、テレビで生中継されるなど、子どもの遊びを超えて大人気となっている。ルールが簡単なため、正月に家族団らんで遊ぶにはうってつけであった。



(番外) お年玉

お年玉は子どもたちの正月の一番の楽しみである。現在では、お金を渡すが、江戸時代までは全く違うものだった。

もともとは、神様に供えたお餅のおすそ分けの「年魂^{としだま}」であり、後に、商家で正月に餅の代わりにお金を包んで奉公人に配るのを「年玉」と呼ぶようになり、それが明治時代以降に一般化した。

唱歌「お正月」に「もういくつ寝るとお正月、お正月にはたこあげて、こまをまわして遊びましょう 早くこいこいお正月」の歌詞がある。昭和時代までの子どもたちは、このようなわくわくした気持ちでお正月を迎えていたと思うが、平成、令和時代の子どもたちは、どのような気持ちでお正月を待っているのだろうか。

注1：その鳥型の凧は3日間落ちてこなかったとの伝説がある。

注2：より大きな凧をいかに長く揚げるかの競い合いに夢中になり、田や畑を荒らしたり、大名行列や武家屋敷に落としたり、果ては喧嘩で怪我人や死者が出たため。

注3：幕府によりイカノボリ禁止令が出されたが、凧を揚げたい庶民が「これはイカじゃなくてタコだ」と言い張った。その後、江戸の一部で使われていたタコ（凧）の名前が広まっていったとの説もある。

注4：当時、子どもの死亡率は高かった。特に蚊を媒介とする伝染病(主にマラリア)の致死率は高かったと考えられる。蚊とマラリアの関係が明確になったのは1880年だが、当時の人々も蚊が何かしら病気に関係していると感じていたと思われる。

注5：当初の双六は二つサイコロを振って行い、最多の目は二つ(双つ)のサイコロで六が出た場合なので、双六と呼ばれた。



プリンス芝公園

強飯式 愛宕神社

1月3日(旧暦)

愛宕権現社^{注1}では毎年正月3日に毘沙門天^{びしゃもんてん}を祀る行事として僧侶に山盛りの飯を強要する強飯式^{ごうはんしき}の行事が行われていた。強飯式は奈良時代から日光山に伝わる独特な儀式である^{注2}。現在、愛宕神社での強飯式は行われていない。

『江戸名所図会』によると、愛宕権現社の別当寺である円福寺を開山した俊賀師^{しゅんがし}がこの強飯式を始めた。俊賀師は日光山の近くの野洲^{やしゅう}（栃木県）の出身といわれている。

1月3日に鐘樓の三度の鐘を合図に、この山の地主神「毘沙門」の使いの者が七尺飾りの長い太刀、頭に毘布で作った兜^{うらじろ}に裏朶^{うらじろ}を前立ちし、注連飾^{しめかざ}りの具を飾り付けて、右手に大きな杓子^{しゃもじ}を杖に従者を従え、男坂を下り円福寺へ向かう。なお、初代歌川広重が安政4年（1857）にこの姿を描いている^{注3}。



名所江戸百景 芝愛宕山

『東都歳事記』によると円福寺の強飯式は次のように執^とり行われていた。院主、僧が列座を連ねて毘沙門の使いを待っている。

僧たちの前には山盛りの飯が盛っており、毘沙門の使いは二間あまりの大俎^{おおまないた}に杓子の杖をつきならし、大声で「さあ喰え、さあ喰え」とご飯を食べることを強要した。

一同は昔からの例にならい「いづれも食べてます。御使者ご苦労でござる。お帰りなされ。」と答え、それを聞いた毘沙門の使いは愛宕権現社へと帰っていく。



江戸名所図会

「強飯頂載」の儀式には無病息災、家運長久のご利益がある。

明治維新後の廃仏棄釈^{はいぶつきしゃく}注4で円福寺が廃仏を選択したために、一時この行事が途絶えた。その後復活して、明治31年（1898）刊行の『新撰東京歳事記』にはこの祭事が記載されている。しかし、第二次世界大戦後に再び途絶え、現在に至っている。

今では、港区で強飯式が行なわれていたことを知る人は、ほとんどいなくなってしまった。

注1：愛宕権現社は神仏分離により、1873年に愛宕神社となった。

注2：日光山輪王寺では今でも毎年4月に強飯式が行われている。

注3：この絵に描かれている人物は広重の自画像といわれている。

注4：仏教を排斥し、寺や仏像などを壊すこと。

■江戸患い

江戸時代の江戸では流通の発展と庶民の生活が豊かになったため、白米中心の食生活となった。参勤交代で江戸に来た武士たちは、間もなく体調を崩して足元も覚束なくなり怒りっぽくなった。しかし国元へ帰るとケロリと治ったことから「江戸患い」といわれた。この病は白米の食べ過ぎで、ビタミンB1の欠乏による「脚気」であった。

また、地方から仕事を求めて江戸に来た庶民も、江戸では白米を食べられるという憧れがあった。強飯式は、白米がご馳走で、かつ五穀豊穡を願う、白米文化の表れである。



武士の食卓

はしご乗り

1月4日

江戸時代には江戸三大大火^{注1}をはじめ、大小合わせて1,798件の火災が確認されている。一番大きな火災は、江戸の大半を焼失したといわれている明暦3年（1657）の明暦の大火であった。幕府は、翌年の万治元年（1658）に4000石の旗本4家をもって「定火消」を組織し、4家には300人扶持を給した。4家は与力・同心と臥煙と呼ばれる火消人足を雇って消火活動を行った。万治2年（1659）に老中稲葉正則に率いられた定火消4組が上野東照宮に集まり氣勢をあげた。これが「出初」と呼ばれ、現在の出初式の起源である。

また、南町奉行の大岡越前守忠相は享保3年（1718）に「町火消」を組織し、享保5年（1720）に「いろは四十七組（のちに四十八組）」^{注2}を編成し、本格的な町火消制度を発足させた。当時の消火活動は出火した家の周りの建物を壊して延焼を防ぐ破壊消防が主のため、高所に慣れ、建物の構造に詳しい鳶職人が適任だった。この町火消も定火消の出初になって、仕事始めの儀式として「初出」を始めた。

初出の際に、はしご乗りを披露するのは、「火事が発生すると、火消の頭は風の方向や火の勢いを見定め、どの家を壊すかを決めて、ここで消し止めるぞという場所に纏を上げた。そのためには、火消は高い位置に、はしごで上らねばならず、日頃から必要な技を磨いていた」のが理由である。



金刀比羅宮でのはしご乗り

『江戸府内絵本風俗往来』によると「いろは四十八組、持場持場を限り練り出す。消防（ひけし）の道具は新しきを極め皆江戸っ子揃いの絆纏、今日に晴れなる春風に、向鉢巻、梯子

を立て、^{はしごのり}曲乗はメ縄祝う輪飾りの……」^{注3}「加賀鳶^{きよくの}の曲乗りは、これまた無類の上手、江戸正月の花ぞにありける」とある。

明治元年（1868）に火消制度の廃止に合わせて出初も初出も廃止されるが、明治8年（1875）に第1回東京警視庁消防出初式として復活した。現在では毎年1月6日に新春恒例の東京消防庁の出初式が江東区有明の東京国際展示場（ビッグサイト）で行われている。なお、この出初式のはしご乗りは、消防庁職員ではなく江戸消防記念会の会員によって行われている。

芝地域では、毎年1月4日に三田春日神社と^{ことひらぐう}金刀比羅宮にて江戸消防記念会第二区^くがはしご乗りを奉納する。

まず、鳶と新しいはしごは神主からお祓いを受ける。その後、12名の鳶が鳶口を使って、はしごを立てる。はしごを支える鳶口には裏白としめ縄が飾り付けられている。鳶は、頂上技16、返し技12、輪っぱ12、道中技12の中のいくつかの技を奉納する。



裏白としめ縄

三田春日神社、金刀比羅宮では多くの見物人が^{かたず}固唾を吞んで、その奉納演技を見守る。

また、毎年1月10日の初こんぴら祭の日には、江戸消防記念会第一から第十一区の代表が揃い、1年の安全を祈って拝殿でお祓いを受ける。参拝が終わると拝殿の外で^{きやり}木遣^{注4}の発声があり、手締めでお開きとなる。なお、この参拝時には、はしご乗りの奉納はない。

明治42年（1909）の出初式で各組^{はしご}梯子乗りを披露していたおり、落死するものがでた。かねてから金刀比羅宮に詣でる第二消防組^{とび}の鳶もまた落下したが、奇跡的にも再び猿（ましら）のごとく上って役を果たした。これも大神の御蔭として以来、市中全組の金刀比羅宮への初詣が慣例化して今日に及んでいる。

現在、港区ではしご乗りが行われているのは前述の両社だけであるが、多くの方に知っていただきたい新年に^{ふさわ}相応しい伝統行事である。



江戸消防記念会正式参拝

注1：江戸の三大大火は以下のとおり。

明暦の大火：明暦3年（1657）。死者は約10万人といわれ、振袖火事とも呼ばれる。

明和の大火：明和9年（1772）。死者1万4700人、行方不明4060人で、ぎょうにんざか行人坂の火事とも呼ばれる。

文化の大火：文化3年（1806）。死者1200人。丙寅（へいいん、ひのえとら）の大火とも呼ばれる。

注2：町火消には、いろは四十七文字があてられたが「へ（屁を連想）」「ら（裸を連想）」「ひ（火を連想、江戸っ子が発音できない）」「ん（語呂が悪い）」は「百」「千」「万」「本」に入れ替えられた。

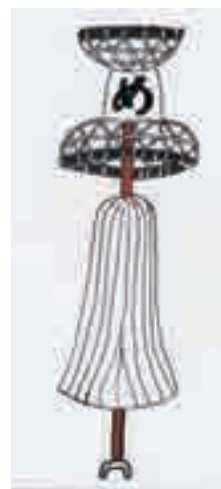
注3：加賀藩の大名火消（諸大名が組織する火消し）の鶯。当時、一番の火消し名人といわれた。

注4：労働歌の一つ。臨濟宗の開祖であるえいさいしやうにん栄西上人が、1202年に考えた掛け声が起源といわれる。江戸時代に江戸の鶯が江戸風を流行させた。

参考文献 『江戸の火事』 黒木 喬 同成社

■文化の大火

文化3年（1806）3月4日に江戸の三大大火の一つである文化の大火（丙寅の大火または車町火事）が、芝車町（高輪二丁目）で発生した。火は南西の風あおに煽られて高輪、田町の通りから三田の薩摩屋敷、本芝付近から金杉、増上寺の五重塔まで延焼。さらに神明宮（芝大神宮）の門前町から数寄屋橋、日本橋を越えて浅草辺りまで焼失した。その長さは約10km、幅は817mで、諸侯の藩邸83棟、寺院66ヶ寺、名のある神社20ヶ所、530余町が焼失した。死者の数は1200余人に上った。



まとい
め組の纏

人日の節句 七草

1月7日

江戸幕府は1月7日の人日^{じんじつ}、3月3日の上巳^{じょうし}、5月5日の端午^{たんご}、7月7日の七夕^{しちせき}、9月9日の重陽^{ちゅうよう}を五節句^{ごせきご}注¹と定め、式日^{しきじつ}（祝日）とした。江戸の庶民もこの行事を祝ったり、厄除けをしたり、大いに楽しんだ。ただし、1月1日は、その力の大きさも別格のために独立して扱い、代わりに正月行事の「人日」注²を節句とした。

なお、この節句をはじめ、江戸時代以前からの歳事は旧暦で行われているため、現在の暦と季節感にずれが生じる注³。

中国の陰陽五行^{いんようごぎょう}注⁴では、奇数を「陽の数字」として縁起がよいとした。そのため、月と日に同じ奇数の重なる日はその「陽の力」は最大になる。しかし、その力が大きすぎるために要注意の日でもあるとされ、禊^{みそぎ}と祓^{はらい}を行った。

「人日」は中国の前漢時代の占いに起源をもつ言葉で、1月7日のことである。中国では、この日に七種類の野菜の入った吸い物を食べ、邪気を払い、1年間の無病息災を願う習慣があった。また、日本では平安時代になると、年の初めに野に出て芽を出し始めた草を摘み取る「若菜摘み」の習慣があった。この二つの習慣が結びつき、活力にみちた若い草（七草）の入った粥を食べて、邪気を払い無病息災を願う節句となった。

平安時代には七種類の穀物（米、粟、黍、稗、蕒子、胡麻、小豆）を炊いて粥にしていた。その後、鎌倉時代になって七種類の穀物から七種類の新菜に変わり「セリ、ナズナ、ゴギョウ、ハコベラ、ホトケノザ、スズナ、スズシロ」の七草となった。さらに、江戸時代では七草を用意するのは大変であるため、ナズナと代用の小松菜など1～2種類で済ませていたという。7日の「七草がゆ」が終わると、江戸の「松の内」も幕を下ろす注⁵。

また、七草を浸した水に爪を漬け、柔らかくし、ふやけたところで切ると一年間の風邪除けとなるため、「人日」の節句は年明けの最初の爪を切る日となっていた。

現在、七草はデパート、スーパーなどで、まとめて売られている。

なお、愛宕神社では1月7日に「七草火焚き祭り」が行われている。お焚き上げは、お札、ダルマ、破魔矢を燃やし、魂を天に送り出す神事である。参列者はその御神火^{ごしんび}に当たって無病息災を願う。その後、参列者には七草粥が振る舞われる。

江戸時代の将軍も長袴^{ながかみしも}に衣服を改めて、恵方に向かい七草粥を食べて、無病息災を祈ったといわれている。私たちも時にはそのような気持ちになって七草粥を味わうのも一興である。



春の七草

注1：節句は、もとは「節供」といわれた。節供には神様にお供えした後に頂いて、神様と人が食卓を共にする「供食^{きょうしょく}」という日本独特の文化が背景にあるといわれる。

注2：正月の1日は鶏、2日は狗（犬）、3日は猪（豚）、4日は羊、5日は牛、6日は馬、7日は人、8日は穀物を占った。7日目は人の日なので「人日」と呼ばれる。

注3：日本の暦は明治5年（1872）に旧暦（太陰暦）から新暦（太陽暦）に切り替わった。明治5年の12月2日の次の日が明治6年の1月1日になった。

注4：中国の春秋戦国時代（紀元前770～紀元前221）に生まれた思想。宇宙の万物は二つの相反する性質のもので成り立っているという陰陽道と、宇宙の万物は、木、火、土、金、水の五要素から成り立っているという五行思想が結びついたもの。

注5：「松の内」の終わりが7日以外の地域もある。

初こんぴら祭

1月10日

万治3年（1660）に讃岐国丸亀藩の初代藩主京極高和が三田の藩邸に金毘羅大権現（明治22年（1889）に金刀比羅宮となる）を勧請^{注1}した。

延宝7年（1679）に藩邸とともに現在地に移転した社が虎ノ門金刀比羅宮の起源である。この神社のご祭神は大物主神と崇徳天皇^{注2}で、海陸安穩、海上守護、大漁満足の神として崇められた。

江戸時代初期の社寺参りの流行で金刀比羅信仰は日本中に広がり、江戸でも天保年間（1830～44）には東都金比羅百社参りが流行した。

丸亀藩では毎月10日の月次祭には藩邸の門を開き、一般の参詣を許した。その日以外は裏門に賽銭箱が置かれていたという。

『東都歳事記』には「参詣の人々は貴賤を問わず、晴れても降っても、朝早く薄暗いうちから押しかけ、植木屋などの露店が並ぶ市がたった」とその繁盛ぶりが書かれている。

新年1月10日は初こんぴら祭が、年末の12月10日は納めのこんぴらが執り行われる。

初こんぴら祭では、齋服^{注3}の宮司以下神職が大鳥居から社殿に向かい、式典が執り行われる。また、境内では獅子舞を先頭に七福神が続き、縁起の良い行列が賑々しく練り歩く。



社殿に向かう齋服の神職

金刀比羅宮では、毎月 10 日に相模流^{はぎわらよし おしやちゅう さとかぐら}萩原由郎社中の里神楽が奉納される。

神楽は神事において神に奉納するために奏される歌舞で、能や狂言に並ぶ伝統芸能である。
宮中で行われる御神楽^{みかぐら}に対し、民間で行われるものは里神楽と呼ばれる。



七福神（相模流 萩原由郎社中）

初こんぴら祭は、獅子舞、七福神、里神楽に出会える貴重な場であるとともに、華やかで楽しい新春の行事である。

注1：神仏の分霊を譲り受けお祀りすること。

注2：保元の乱（1156年）で後白河天皇に敗れ讃岐に配流された後、金比羅本宮への崇敬が篤かった。崩御（1164年）の翌年に相殿に合わせ祀られた。

注3：純白、無紋の神官の着る服。

注4：里神楽は石見神楽と江戸里神楽がある。江戸里神楽には、落ち着いた動きの「江戸流」と派手な見せ場が多い「相模流」がある。なお、里神楽については様々な定義や分類がある。

初寅

その年最初の寅の日

初寅とは、その年最初の寅の日^{注1}、または、この日に福德を願って毘沙門天^{びしゃもんてん}に参拝することをいう。吉日の中でも最も金運のある日とされ、金運招来日^{注2}ともいわれる。

『東都歳事記』には「毘沙門天^{たもんてん}は多聞天^{たもんてん}ともいい、仏法守護^{ふくとくせよ}、福德施与^{ふくとくせよ}の誓願を有するといわれ、虎は千里を走るといふ諺^{ことわざ}により、金銀を走るように儲けるようにと寅の日を縁日にした」とある。

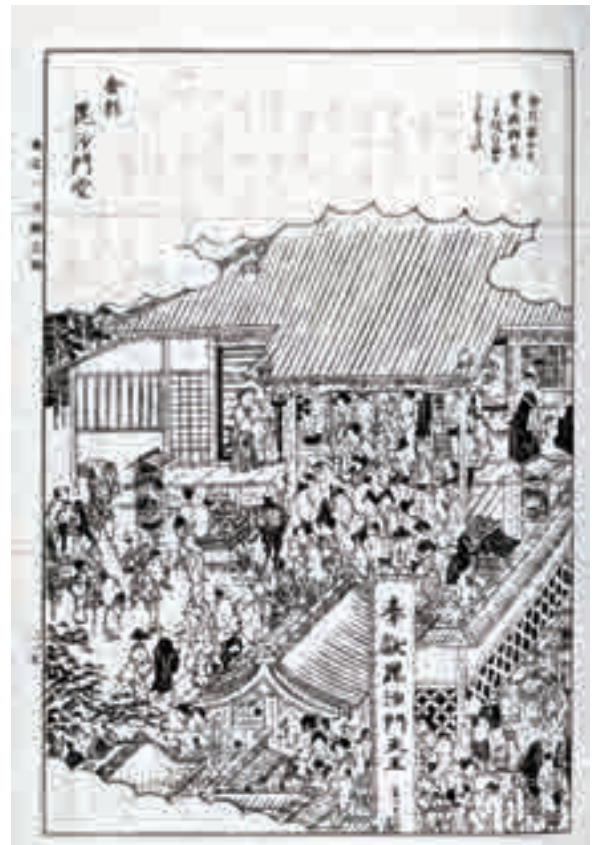


寅寅

毘沙門天は帝釈天^{しゅみせん}に仕え、須弥山の北面を守る四天王の一尊である。四天王の一尊として語られるときは「多聞天」と呼ばれ、単独で語られるときは「毘沙門天」と呼ばれる。

寅（虎）は毘沙門天の眷属^{けんぞく}^{注3}であり、聖徳太子^{もののべのもりや}が物部守屋を討伐する際に、天高く毘沙門天が現れ、必勝の秘法を授けた時も、寅の月、寅の日、寅の刻であったといわれる。また、聖徳太子が同時に多くの人の話を聞いたというエピソードも毘沙門天（多聞天）の御加護があったからといわれている。毘沙門堂の前には^{こまいぬ} 狛犬ならぬ^{こまどら} 寅寅が置かれることが多い。

江戸時代には、芝金杉^{しょうでんじ}の正伝寺、牛込神楽坂^{ぜんこくじ}の善國寺、浅草^{しょうぼうじ}の正法寺が、三大毘沙門堂として有名であった。なお、正伝寺には^{でんぎょう} 伝教



江戸名所図会

だいし
大師（最澄）作といわれている木彫りの毘沙門天像が安置されている。

初寅の日、正伝寺には多くの参詣者が集まり大変賑わった。また、江戸城大奥の奥女中から吉原の女郎衆まで、信者も幅広かった。参拝者の多くは正伝寺でお参りした後、芝大神宮もうに詣で、門前で「ひうち石」を買い求めたそうである。現在でも、毘沙門堂が御開帳むか注4になる初寅の日には善男善女がお詣りをしている。また近年では江戸時代の「百足小判」注5を復活させている。江戸時代に人気のあった庶民信仰の一つが、今もこの地に脈々と息づいている。

注1：十二支の寅にあたる日で、12日ごとに巡ってくる吉日のこと。

注2：財布の新調や宝くじの購入に良い日とされる。

注3：仏教用語で、親しく従う者、仏や菩薩などの従者、家来、配下などをいう。

注4：5月、9月の最初の寅の日にも御開帳が行われる。

注5：財布に入れておくとお金に困らないといわれている。百足も毘沙門天の眷属である。

参考文献 『正伝寺大毘沙門天縁起』

■ 毘沙門天

四天王は、宇宙の中心そびに聳える須弥山しゅみせんの中腹にある四天王天の四方に住んで、仏法を守護する四尊の護法神である。毘沙門天が出現したのは寅の年、寅の月、寅の刻といわれ、そのため、寅（虎）は毘沙門天の眷属といわれている。東方に持国天、南方に増長天、西方に広目天、北方に多聞天が位置し、外敵や悪者に目を光らせている。特に、多聞天の別称である毘沙門天は多くの武人たちの信仰と崇拝を集めた。また、寺院で堂内に仏像を祀る壇しゅみだんを須弥壇といい、四天王が東西南北を守っている。毘沙門天には護法、施福、財宝、子宝、戦勝の加護があるとされている。



毘沙門天

七福神めぐり

1月1日～成人の日

いつの時代でも人々は、健康で長生きをしたい、金持ちになりたい、出世をしたいなどの開運招福を神社寺院に祈願していた。

江戸時代の文化文政期（1804～30）に庶民に広まった七福神めぐりは神仏に祈願する信仰と、参詣を行楽として楽しむ娯楽との両面があった。七福神めぐりは通年の所もあるが、通常は正月1日から7日に行われることが多い。なお、「港七福神めぐり」では1日から成人の日までとしている。

七福神めぐりは室町時代に京都で始まったといわれ、江戸では宝暦年間（1751～64）に始まった谷中七福神が最も古いといわれている。

なお、『東都歳事記』記載の山の手七福神めぐりの寺社は毘沙門びしゃもん（二本榎細川候御屋敷前知将院）、布袋ぼてい（白金端聖寺）、寿老人じゅうろうじん・福祿寿ふくろくじゅ（白金妙圓寺）、辨天べんてん（目黒蟠龍寺）、愛比えび・大黒おほくろく（目黒不動尊）である。

七福神信仰とは「仁王般若心経を信じることにより七難が七福に変わる」との信仰である。七福の徳目に七福神が対応している。長寿が「寿老人」、裕福が「大黒天」、商売繁盛が「恵比須神」、福德円満が「布袋尊」、疾病・災難を取り除き大願成就を果たす「毘沙門天」、開運出世・財宝を授ける「弁財天」、幸福・封禄・長寿は「福祿寿」である。

七福神の出自は、大黒天・毘沙門天・弁財天はインドの神。寿老人・福祿寿は中国の道教の神。布袋尊は実在した中国の僧。恵比須神は日本の古神道^{注1}の神である。

港区の七福神めぐりは昭和8年（1933）に発足した「麻布稲荷七福神詣」が始まりである。これは、「氏神様へのお詣り」や「お稲荷様の現世利益の信仰」を盛んにしたい旧麻布区内の稲荷神社と、乗客を増やしたい市電とがタイアップして、地域振興を目的に決められた。



当初、麻布稲荷七福神は恵比須（飯倉熊野神社）、大黒天（六本木朝日神社）、毘沙門天（麻布氷川神社）、弁財天（末廣神社）、布袋尊（久国神社）、寿老人（櫻田神社）、福祿寿（天祖神社）、宝船（竹長稲荷神社）となっていた。

その後、昭和41年（1966）に港区観光協会の提案によって、弁財天を祀る宝珠院、大黒天を祀る大法寺の二寺院が入れ替わり、現在の「港七福神めぐり」がスタートした。

なお、港七福神めぐりでは、八番目のお詣り先として、麻布十番稲荷（旧竹長稲荷神社と旧末廣神社の合祀）があり、七福神が全員乗った宝船を配している。8つの寺社をお詣りする七福神めぐりは大変珍しい。

正月2日の夜に宝船の絵を枕の下に敷いて、縁起の良い初夢を見たならば、その一年の幸福は約束されると江戸っ子は縁起担ぎをした。また縁起の悪い初夢を見た場合は、宝船の絵を川に流して無かったことにした。

なお、七福神乗合宝船絵には以下のような回文^{かいぶん}^{注2}が添えられていくようになった。



十番稲荷神社の宝船

「永き世の 遠の眠りの 皆目覚め 波乗り船の 音のよきかな」

（なかきよの とをのねふりの みなめさめ なみのりふねの をとのよきかな）

現在、毎年正月に芝の語り部のガイドによる港区七福神ツアーが行われている。よき一年を祈念して、多くの人々がツアーに参加している。

注1：仏教の影響を受ける以前から日本人が信仰していた神道。

注2：始めから読んでも、後ろから読んでも同じ文。

成人式

1月第2月曜日

国民の祝日に関する法律（昭和23年（1948））によれば、成人の日は「おとなになったことを自覚し、みずから生き抜こうとする青年を祝いはげます」ことを趣旨としている。

宮中や貴族社会では1月5日まで、武家社会では1月11日までに行われていたが、国民の祝日にする際にはこれら特定の階級の習慣を避け、しかも松の内（関東では7日まで、関西は15日まで）との理由で1月15日が成人の日となった。さらに連休をつくる目的で祝日法が改正され、平成12年（2000）からは1月の第2月曜日となった。

日本では古来から、男の子が大人の仲間入りをする通過儀礼が行われていた。

天武11年（682）には儀式として制定され、まずは宮中や貴族社会で執り行われ、その後に武家にまで広がった。この儀礼は、奈良時代以降「元服」^{注1}と呼ばれた。さらに武家の場合は烏帽子親^{えぼし}^{注2}により烏帽子を被せられ、それまでの幼名を廃して、元服名である諱^{いなみ}をつけた。

江戸時代になると、烏帽子は被らずに前髪を剃って月代^{さかやき}^{注3}にすることで済ませるようになった。さらに庶民の間でも、貴族や武士にならって18～19歳で元服を行うようになり、禪祝^{ふんどしいわい}、烏帽子祝とも呼ばれた。

女の子の場合も同様の通過儀礼が行われていた。

平安時代中期には13～16歳ごろに垂らしていた前髪を結び上げる^{くしあげ}髪上^もが行われ、裳（正装のときに着ける衣）を着て、お歯黒をして眉墨を引くようになった。

江戸時代になると、女性も元服と称し、結婚するときや未婚でも18～20歳になると行われ、地味な着

物を着て、髪型を変え、厚化粧となった。別名、鉄漿^{かね}（お歯黒）付け祝、ゆもじ（腰巻）祝とも呼ばれた。

なお、明治9年（1876）に制定された民法で成年年齢は20歳とされたが、2022年4月1日より民法の一部が改正され、成年年齢が18歳に引き下げられる^{注4}。



港区の成人の日記念のつどい

現在のように地方自治体が20歳の新成人を集めて行う成人式は、昭和21年(1946)に蕨市(埼玉県)で行われた成年式が最初である。

港区の成人式は昭和28年(1953)に開始され、第一部は式典、第二部は会食・懇談となっている^{注5}(令和元年度現在)。過去5年間(平成26～30年度)の港区の成人式の平均参加率^{注6}は51%で、令和元年度の参加者は772名(内転出者126名)^{注7}となっている。



成人の日の晴れ姿

注1：「元」は初め、「服」は着物の意味があり、元服には「子供が成長して初めて着物を着る」という意味がある。また、その他に、「元」は首、「服」は着用を表す意味があり、元服には「頭に冠をつける」という解釈もある。

注2：元服儀式の際に烏帽子を被せる者。実の親ではなく、その子の将来を支える特定の人物が^{かりおや}仮親となって烏帽子を被せる。

注3：成人男性の髪形で、前頭部から頭頂部にかけての頭髪を剃り上げる。

注4：成人式の対象年齢も18歳にするかは不明。成人式は法律ではなく、各自治体の判断による実施である。18歳にする問題点として、高校3年の1月は受験期間の最中、2022年は3年分をまとめるのか等がある。

注5：公募新成人と青少年委員からなる実行委員会が企画・運営をしている。

注6：外国籍の新成人も含まれ、平成31年は113名が対象であった。

注7：港区では、住民基本台帳が港区以外の新成人についても、希望があれば成人式に参加することができる。このため、進学や就労のために港区を転出した新成人でも学生時代のクラスメイトと一緒に参加することが可能となっている。

釜鳴神事 御田八幡神社

1月15日、5月15日

御田八幡神社では1月15日と5月15日に釜鳴^{かまなり}神事^{しんじ}が執^とり行われる。釜鳴神事は、釜を焚いた時に鳴る音の強弱・長短とその日の干支によって吉凶^{きつきょう}禍福^{かふく}を占う。元々は吉備津神社（岡山県）で行われていたと思われるが、いつから始まったかは不明である。なお、吉備津神社では鳴釜神事^{なるかましんじ}^{注1}と呼んでいる。鎌倉時代中期に書かれた『拾芥抄』^{しゅうがいしやう}^{注2}には、その判定基準の記述がある。

この貴重な神事を執り行っている神社で、全国的に知られているのは、御田八幡神社や吉備津神社である。

御田八幡神社の釜鳴神事は以下のように厳かに執り行われる（取材は令和元年（2019）5月15日）。なお、釜鳴神事は、氏子でなくても参列が認められている。

宮司が、拝殿中央に設置された竈^{かまど}に炭火を入れ、水の入った鉄釜を載せ、円筒状の蒸籠^{せいろう}を重ね、一番上の丸蓋を少しずらし、一部を開口させて準備を整える。

神職全員で祝詞の唱和を始め、やがて「ブオー」とでも表現すべき心地よい重低音を含む蒸気の連続音が、静かではあるが力強く室内に満ちる。

この音を受けて、宮司から「今年は、例年より早く始まり、早く終わりました。色々な捉え方があるでしょうが、早く決断し、すぐに実行に移すのがよろしいと解釈される方もあるでしょう。皆様でお考えいただければよろしいと思います」との話が参列者にされた。

吉凶禍福を占う釜鳴神事ではあるが、参列者に吉か凶かの結論のみを示すのではないことが、この神事を品位のあるものに行っている理由の一つかもしれない。

注1：室町時代の『多聞院日記』や江戸時代の『雨月物語』にも記述があり、当時は良く知られていた神事と考えられる。

注2：鎌倉時代中期に原型が成立した百科事典。



御田八幡神社の釜鳴神事

藪入り・閻魔参り

1月16日、7月16日

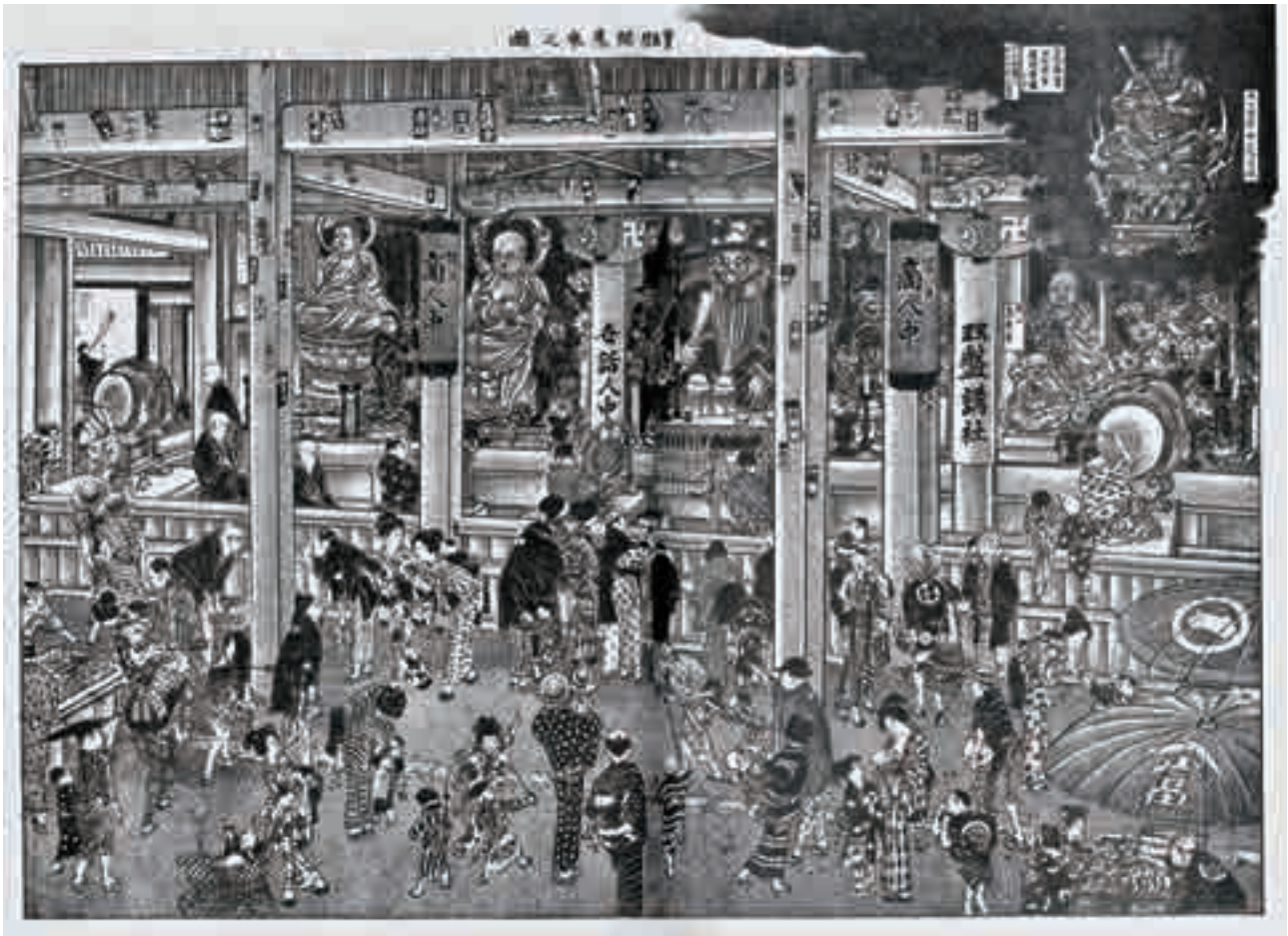
江戸では、1月16日、7月16日は閻魔^{えんま}^{注1}の斎日^{さいにち}^{注2}で、地獄の釜の蓋が開くといわれ、地獄で亡者を責め虐める鬼も仕事を休むので、亡者も責め苦を免れるといわれている。

この日は、奉公人である丁稚^{でっち}たちも「藪入り」^{注3}として、年に2回の休みがもたらえた。各商家では、丁稚たちに未明から休暇を与え、日帰りで親元に帰した。旦那から小遣いと新調の衣服をもらい親元に帰った丁稚たちは、日頃の生活を親に報告して、親とともに閻魔堂に参拝した。参拝後は、増上寺山内、上野寛永寺、浅草寺奥山等で遊び、夕食後に母親に伴われて店に戻った。

閻魔は死者の裁きをする裁判官なので、江戸の人々は閻魔様にお参りをして、地獄に落とされないように祈願していた。

『東都歳事記』には、芝地域で閻魔参りが行われていた寺院として、宝珠院^{ほうしゅいん}、花岳院^{かがくいん}、金地院^{こんちいん}、栄立院^{えいりゅういん}、実相寺^{じっそうじ}などが載っている。

宝珠院では、藪入りの縁日には参詣人が群集して、念仏講が行われた。門前には露店、茶屋等が立ち並び、見世物小屋も出て大いに賑わった。この縁日は、昭和33年頃まで続いたそうである。



新撰東京名所図会

芝公園の宝珠院には、港区指定文化財の素晴らしい閻魔像がある。高さ2メートルの寄木造り、中国の宋時代の裁判官の姿で、貞享2年(1685)の作といわれている。写真の(向かって)右の人頭杖^{にんとうじょう}注4は、善を見通す黒閻天女^{こくあんでんにょ}、左の人頭杖は、悪を見通す大山府君^{だいさんふくん}である。また、閻魔大王と書記官役の司録^{しろうく}、検事役の司命^{しみょう}もいて四眷属^{けんぞく}が揃っているのは貴重である。



宝珠院の閻魔像

注1：元々は古代インドの神であるが仏教では地藏菩薩の化身である。

注2：仏教で戒律を守り、行いを慎む日。

注3：草木の深い田舎に帰ることから、この名前が付いたといわれている。「宿入り」「宿下がり」などとも呼ばれる。

注4：頭が先についている杖。大山府君は死者が偽りを言うとき火を吐くといわれ、黒閻天女は死者の善行を見るといわれている。

■ 地藏十王教

冥界にあって、死者を裁く裁判官として十王がいる。閻魔様は5番目の王で死者の罪状を決めた。死者に対して審理は通常7回行われる。没した後、七日ごとに初七日、十四日、二十一日、二十八日、三十五日(裁判官は閻魔王)、四十二日、四十九日と審理が計7回行われ、問題がないと判断された場合は死者は転生^{てんしやう}する。7回で決まらなかった場合はさらに百箇日、一周忌、三回忌と3回の審理が行われる。なお、三回忌までには必ず決定される。

節分

2月3日

本来、節分とは、一年の季節の分かれ目のことで、立春、立夏、立秋、立冬の前日を指す。江戸時代になると、立春の前日を指すようになった。また、旧暦では元旦が立春となるので、12月晦日^{みそか}が節分となる。

季節の分かれ目には特に邪気が入りやすいので、魔除けのために豆をまく。

節分の由来は、古代中国の「追儺式」^{ついな}にある。「追儺式」では、12月晦日に、邪気や疫病などを追い払うために、鬼^{注1}の面をかぶった人を弓矢で追い払った。これが奈良時代に日本に伝わり、平安時代には宮中の行事となった。また、日本では弓矢で追い払う代わりに、魔除けの呪力があるといわれている豆をまいた^{注2}。

現在、芝地域の多くの寺社^{注3}で、大勢の子どもたちや近隣の住民が参加して節分の豆まきが行われている。特に増上寺では、大勢の観光客に加え、タレントや力士なども参加して大変な賑わい^{にぎ}を見せる。



増上寺での豆まき

一方、各家庭では、子どもたちが「福は内、鬼は外」^{注4}と元気な声を上げて、鬼役の大人に豆をまく姿が見られる。そして自分の年の数（地域によっては一つ追加）の豆を食べて、邪気を払い、病に勝つ力を得ている。

また、節分の日「やいかがし」^{ひいらぎ}（柊の小枝に焼いたイワシの頭をさす）を門口に飾る習慣がある。柊の葉の棘^{とげ}とイワシの臭いは邪気を払うといわれている。実際に、高輪のまち歩きで、あるお寺の家族3人が「やいかがし」を飾っているのを見かけた。



やいかがし

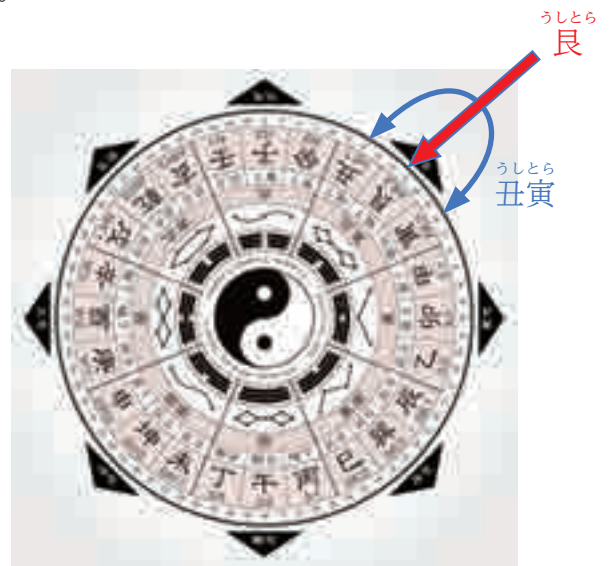
五節句は新暦で祝うようになったが、節目の行事は旧暦のままで行われている。そのため、節分は、江戸時代の人々と同じ季節感を共有できる貴重な行事である。

注1：現在、最も知られている鬼の姿は鬼門である艮（うしとら うしとら丑寅の中間）が由来である。角は丑（牛）から、黄色と黒の模様つのの腰巻と牙は寅（虎）からの発想である。

注2：三田の「綱坂」「綱の手引坂」の名前の由来となった武将の渡辺綱（953～1025）には鬼退治の伝説が残っている。そのため、渡辺姓の人は、その名前を聞いただけで鬼が逃げていくので、豆まきをしなくても良いといわれている。

注3：芝地域で豆まきを行っている寺社（平成31年現在）増上寺、芝大神宮、ことひらぐう金刀比羅宮、愛宕神社、御田八幡神社、三田春日神社、西久保八幡神社、日比谷神社、からすもりじんじゃ みほ かしまじんじゃ烏森神社、御穂鹿嶋神社、元神明宮、東京タワー大神宮など（順不同）。

注4：鬼は神様として祀られている場合もあり「福は内、鬼は内」の掛け声を使う新宿のいなりきおうじんじゃ稲荷鬼王神社などがある。



方位図

■ 豆をまくのはなぜ？

むかし鞍馬の奥に人々を苦しめる鬼が住んでいた。ある時、毘沙門天が現れて七人の賢者を呼び、三石三斗（約600ℓ）の大豆で鬼の目を撃てと命じたという話が伝わっている。

鬼の目に豆を投げつけて「魔目」、魔を滅するので「魔滅」に通じるともいわれている。



御田八幡神社にて

■ 豆を炒るのはなぜ？

むかし佐渡ヶ島の人々に害を与える鬼が住んでいた。

神様は人々の安全のために、「鬼が一夜のうちにきんぼくさん金北山に百段の階段をつくれるか」で鬼と賭けをした。一段を残して夜が明けたために、鬼は賭けに負けて島を去ることになった。その際に「豆の芽が出る頃にまた来るぞ」と鬼が残り残したために、神様は豆の芽が出ないように人々に豆を炒ることを命じた。

『年中行事を「科学」する』 永田 久 日本経済新聞社

初午

2月最初の午の日

初午はつうまとは、2月最初の午うまの日に商売繁盛を願って稲荷社に参拝することをいう。

これは京都の伏見稲荷神社の祭神が、伏見山上に降りたのが和銅4年（711）2月初めの午の日であったからといわれている。稲荷はもともと農業の神であったが、商人が現世利益のために祀るようになり、商売繁盛の神になっていった。江戸時代には「伊勢屋 稲荷に犬の糞ふん」といわれるほどに江戸では稲荷社が多かった。また、大名屋敷、旗本屋敷および商家や長屋の共用の場所などにも守神（屋敷神）として勧請かんじょう^{注1}された。

初午祭には稲荷神社の社前に正一位稲荷大明神のぼりの幟のぼりが立てられ、信者は眷属けんぞく^{注2}の狐たき^{注3}の好物である油揚げあぶらあげ^{注4}や目刺しを供える。多くの屋台が出て笛太鼓のお囃子や奉納神楽などが盛んに上演され大層賑わった。稲荷信仰の祭神は神道系の宇賀御魂命うかのみたまのみかみ^{注5}と仏教系の茶枳尼天ちやくにてん^{注6}である。『東都歳事記』には、日比谷稲荷は「源助町と芝口三丁目の間 東の横小路に仮屋を儲けて神輿うつを遷す…（中略）…日蔭町の通り 行燈に年々工夫を凝らす」とあり、烏森稲荷については「別當快長院 神主山田氏 初午の二日以前より、幸橋御門外へ仮屋を補理して御旅出あり 同日産子町に神輿を渡し…（中略）…又隔年に踊練物を出せり旅所にて杉の葉守おふだの神符あたまを與う」と記されている。



初午祭の神事

いずれも多くの見物人が押し寄せて、芝っ子の血を湧かせる特別な祭礼であった。両社の初午祭は江戸で十本の指に入るほどの賑わいであった。なお、港区では他に豊川稲荷東京別院があり、大名になった大岡越前守おおおかえちぜんのかみの子孫が、その領地の豊川稲荷を勧請し邸内社にした。一般の人々の参拝が許されると、初午の日には商売繁盛と金儲けの神として江戸っ子が押しかけるようになった。

また、この日は子どもたちが手習いの師匠の元や寺子屋に通い始める日でもあった。通い始めは7才の初午の日が一般的であり、持って行く道具は、天神机と呼ぶ稽古机、手文庫、硯箱、半紙などである。これは、現代の4月の小学校入学と同じ意味合いであろう。

現在、烏森神社では毎年旧暦2月（新暦3月）の初午の日に初午祭の神事が執り行われると（一時中断していたが、昭和36年に復活）。この神事は氏子のみ参加が許され、神主のお祓いを受けて各自が、榊さかきではなく杉の葉を神前に供える。

江戸時代から伝わるこの厳かな神事によって、当時の人々と同じ時間を共有している感覚になった。

注1：神仏の分霊を譲り受けお祀りすること。

注2：仏教用語で、親しく従う者、仏や菩薩などの従者、家来、配下などをいう。

注3：狐は穀物を食い荒らす害獣を捕食し、また、毛の色や尾が実った穂に似ているので、稲荷神の使者となったといわれる。

注4：油揚げを供える理由は、狐の好物だからといわれているが、実は狐は雑食で何でも食べる。

注5：稲の精霊が神格化されたもの。

注6：閻魔大王の配下。インドでは死者から精を奪う女夜叉であったが、日本に渡った後は、一人の神となり、白い狐に乗る美しい天女となった。

参考文献 『烏森神社縁起』

■ 落語「明烏」

初午の祭りは商売繁盛にもご利益があるといわれた。そのため、客商売である吉原の中にも4つの稲荷神社が造られ初午の日には賑わった。あけがらす「明烏」は堅物の若旦那の時次郎が町内の遊び人に手引きされ、初めて吉原を訪れる話である。その際に時次郎を誘い出す口実にしたのが「初午にお稲荷さんへお参りに行きましょう」であった。

3月

やよい
弥生

上巳の節句 ひな祭り

3月3日

3月3日は上巳^{じょうし}の節句で、女の子の健やかな成長を願う日である。
五節句の一つで、別名、桃の節句と呼ばれる。

古代中国では、三月最初の巳^みの日を上巳^{じょうし}といい、この日に形代^{かたしろ}（人の形に切った紙）で体を拭い、それを川に流して穢^{けが}れを祓^{はら}った。

また、日本では、貴族の女子が「ひいな（人形）遊び」を行っていた。
この二つが合わさり、ひな祭りになったといわれている。

上巳の節句が桃の節句とも呼ばれるのは、旧暦の3月は桃の花の開花の時期であること、中国では桃の木^{注1}が悪魔を打ち払う神聖な木と考えられていたからである。



形代

雛人形が飾られるようになったのは江戸時代の寛永年間（1624～44）の頃で、当時の大きな雛は寛永雛と呼ばれ、高さが54cmほどもあった。その後、享保年間（1716～36）には、小さな享保雛が現れ、寛延年間（1748～51）に二段飾り、明和年間（1764～72）には三段飾り、天保年間（1830～44）には七段飾りが現れた。



The Okura Tokyo の雛人形

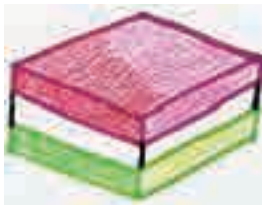
また、節句に先立つ2月25日から3月2日にかけては、日本橋の十軒店、尾張町から芝神明前の一帯、駒込などの各地に雛市がたった。

『東都歳事記』には、「上巳御祝儀、諸侯御登城、良賤佳節を祝す」と記されている。幕府は上巳の節句を五節句のひとつに定め、各大名は将軍に献上物をして菓子を賜った。武家や町家では雛人形を飾り、白酒、蛤の御吸物、雛あられ、菱餅など^{注2}で楽しんだ。

なお、雛人形については、「前日から飾る一夜飾りは縁起が悪い」「3月3日を過ぎて長く飾ると婚期が遅れる」との言い伝えがある。

注1：桃の実も邪気を払い、不老不死の霊薬と考えられている。これは紅い小さな花が豊潤な果実を付けることが、不老不死のイメージにぴったりだからといわれている。桃太郎も「桃が邪気を払う」から生まれたといわれている。

注2：「蛤のお吸い物」は、二つに分かれた蛤の貝殻は他の貝殻とは決して合わないことから、一人の男性と一生添い遂げられるようにとの願いがある。



菱餅

しず

て龍神を鎮めたとあり、菱は女の子を災厄から守る力があるといわれる。

「雛あられ」は炒る際に、良く爆ぜると吉、それ以外は凶を示す。

「菱餅」は、菱形は心臓の形を示し、赤の餅は魔除け、白の餅は清浄、緑の餅は邪気を払うことを意味する。また、インドの故事には川の氾濫を鎮めるために、龍神に女の子を生け贄に捧げていたが、菱の実を代わりに捧げて龍神を鎮めたとあり、菱は女の子を災厄から守る力があるといわれる。



蛤の御吸物



雛あられ

■ 男雛は左か右か？

当初、男雛は左(向かって右)に飾っていた。これは日本の古来からの風習「左をもって尊し」に由来する。一方、欧米では「右に男性」の儀礼があり、これは「右に剣を持ち、左で女性を守る」に由来する。

昭和天皇が即位された際の写真は、欧米の儀礼が採られ天皇陛下が右(向かって左)、皇后陛下が左だった。これ以降、男雛を右に飾ることが主流になった。なお、京都など一部の地域では今でも古来の風習通り左に飾られている。



お彼岸

3月春分の日、9月秋分の日

国民の祝日に関する法律によれば、春分の日は「自然をたたえ、生物をいつくしむ」、秋分の日は「祖先をうやまい、なくなった人々をしのぶ」ことを趣旨としている^{注1}。

3月の春分の日と9月の秋分の日を中日^{ちゅうにち}として、その前後3日間を合わせた計7日間が「お彼岸」である。それぞれ、最初の日を「彼岸入り」、最後の日を「彼岸明け」という。

春分、秋分の日は、真東から太陽が昇り、真西に太陽が沈むことから、昼と夜の長さが同じになる。仏教では、ご先祖様がいらっしゃるあの世（彼岸）、すなわち極楽浄土は西にあり、私たちの住むこの世（此岸）は東とされることから、この日は彼岸と此岸が最も近くなる日として、寺院では先祖供養の彼岸会^{ひがんえ}が行われる。

また、日本には、古来より祖先の霊^{それい}に対して、祖霊崇拝の習わしがある。

この仏教の極楽浄土と日本古来の祖霊崇拝の考え方が結びつき、ご先祖様^{しの}を偲ぶ日として、お彼岸の行事^とが執り行われるようになった。なお、インドや中国にはお彼岸の考えはない。



玉鳳寺 彼岸花

同じ先祖供養でも「お彼岸」と「お盆」には大きな違いがある。

「お盆」は極楽浄土から帰ってくるご先祖様を各家でお迎えして供養し、楽しく賑やかに時を過ごし、送り火を焚いてお見送りする。

これに対し、「お彼岸」は彼岸の世界にいるご先祖様の近くに私たちが会いに行く。各家ではお墓やお寺に参り、お供え物をするなど静かにご先祖様を偲ぶ。

お彼岸のお供え物として欠かせないものに「あんこの餅」がある。春の彼岸では「牡丹餅」、秋の彼岸では「お萩」と呼ばれる^{注2}。「牡丹餅」「お萩」の名称は春と秋に咲く「牡丹」と「萩」の花にちなむ。

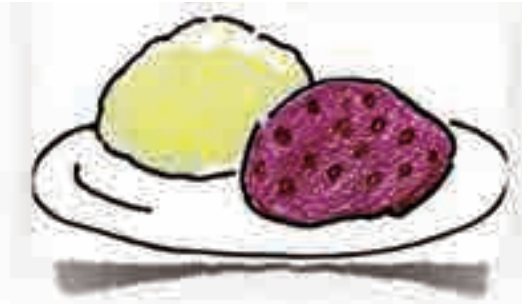
また、春と秋ではあんが異なる。春は「こしあん」、秋は「粒あん」である。これは、春の彼岸では、冬を越した小豆を使うために堅い皮を取り除き、こしあんにするからである。

これに対し、秋の彼岸では、収穫したばかりの皮まで柔らかい小豆を使うために粒あんにする。

なお、小豆の赤は魔除けの色といわれ、邪気を払うとされている。

日本全国には約7万5000の寺院があり、港区には約260もの寺院がある^{注3}。

お彼岸には、これらの寺院にあるお墓に多くの人々がお参りに訪れる。そして、お彼岸の間は線香の煙が絶えることがない。



牡丹餅とお萩

注1：祝日のうち、「春分の日」および「秋分の日」は、法律で具体的に月日が明記されずに、それぞれ「春分日」「秋分日」と定められている。

「春分の日」および「秋分の日」については、国立天文台が、毎年2月に翌年の「春分の日」「秋分の日」を官報で公表している。

注2：現在のように牡丹餅やお萩が甘くなったのは、砂糖が庶民でも手に入るようになった江戸時代中期以降。それまではもち米と小豆を炊いた塩味のものであった。

注3：港区に寺社が多かった理由としては以下のことが考えられる。

江戸時代、参勤交代により、各大名は人生の半分近くを江戸で暮らすことになったため、国元との結びつきを維持するために領地内の神社を^{かんじょう}勧請した（丸亀藩邸の金刀比羅宮、久留米藩の水天宮など）。また、藩主、正室、子女および江戸勤めの藩士のために、各藩では江戸での菩提寺が必要とされた（泉岳寺、東禅寺など）。江戸の人口が増加し、加えて江戸庶民のご利益に対する関心が非常に高かった。

■ 暑さ寒さも彼岸まで

彼岸を境に一気に気温が変化するという意味の「暑さ寒さも彼岸まで」との慣用句がある。真冬のように寒い日が続いても春分を過ぎると一気に春めく、真夏のように暑い日が続いても秋分を過ぎると一気に秋めくことをいい「冬の寒さ（余寒）、夏の暑さ（残暑）は彼岸を過ぎると^{やわ}和らぎ^{しの}凌ぎやすくなる」という意味である。

温暖化が急速に進む今日、この慣用句がいつまで通用するのだろうか。

花見

4月上旬

花見とは、桜の花を觀賞して、春の訪れを祝う行事である^{注1}。

奈良時代の貴族が行った花見の花は、遣唐使が中国から持ち帰った「梅」であった。

平安時代になると、当初珍しかった梅が植栽によって増え、さほど珍重されなくなった。また、日本独自の美しさを探求^{注2}するようになり、普通に見られる桜の美しさが評価された。さらには、嵯峨天皇（786～842）が桜を非常に愛して、花見の花として桜を選んだ。これらの理由により花見の対象が「桜」へと変わっていった。

鎌倉・室町時代に貴族から武士階級にも花見の風習は広がり、さらに江戸時代には庶民にも広がっていった。この理由として、徳川吉宗が庶民のために御殿山、飛鳥山、隅田川堤、小金井堤に桜を植えさせたことによる^{注3}。また、江戸中期以降に、庶民の経済力が高まったことも大きな要因であった。なお、江戸時代の桜の名所として、芝地域では愛宕山がよく知られていた。



新撰東京名所図会

「花より団子」といわれるように、花見には団子が欠かせない。三色の団子の桃色は春の桜の花を、白は冬の残雪を、緑は初夏の植物の緑を示す。また秋がないのは、「飽きがこない」と掛けている。



三色団子

現在、私たちが楽しんでいる桜はソメイヨシノ（染井吉野）が中心であるが、このソメイヨシノは、「エドヒガン」と「オオシマザクラ」を異種交配して生まれた桜の中から特に優れた1本を選び、接ぎ木で増やしたクローンであり、野生種ではない。ソメイヨシノは、「葉より先に花が咲く」「美しい薄紅色の花が咲き乱れる」「散り際が潔い」「5年ほどで見栄えのする大きさに成長する」「クローンのため、（同じ条件なら）開花時期がほぼ同時」などの利点がある。そのため、昭和の高度成長期に全国の街路樹として、また、河川敷や公園などに数多く植えら

れた。なお、最近では病気に強いジンダイアケボノなどへの植え替えが進んでいる^{注4}。

ソメイヨシノ^{注5}は、江戸時代末期から明治初期に、江戸の染井村（現在の駒込）の造園師や植木職人たちによって開発されたことからその名前が付いた。

現在、芝地域における桜の名所の一つに芝公園がある。芝公園には約400本の桜があり、毎年多くの花見客で賑わう。特に近年は外国人の花見客が飛躍的に増えている。

令和の時代になり、花見はどう変わっていくのであろうか。



増上寺の桜

注1：農村では、秋の収穫の豊凶^{ほうきょう}を占うために、春になると花見を行い、花の数を数えたといわれる。なお、その際の花は桜に限らず、その時期に一番盛んに咲く花であったという。

注2：承和6年（839）以降に遣唐使が廃止され、大陸の文化が入らなくなったことも影響している

注3：御殿山には吉野山の桜、飛鳥山には江戸城吹上の桜、隅田川堤には桜以外にも桃、柳が植えられ、中野には桃園が造られた。

注4：ソメイヨシノは樹齢約40年で成長が止まり、十分な手入れをしないと60年過ぎから花の数が減少したり、病原菌に侵されたりするようになる。ジンダイアケボノは、姿はソメイヨシノと瓜二つでありながら病気に強い。

注5：当初は桜の名所である「吉野」または「吉野桜」の名前で売り出されたが、吉野のヤマザクラとは異なる種と判明したため、1900年に「ソメイヨシノ」と命名された。



ジンダイアケボノ

参考文献

『散歩で見かける街路樹 公園樹 庭木図鑑』 葛西 愛 三省堂書店

4月

うづき

卯月

御忌大会 増上寺

4月2日～7日

御忌大会^{注1}は、増上寺で毎年4月に行われる浄土宗の宗祖（創始者）法然上人^{注2}の忌日^{きにち}法要^{注3}をいう。増上寺においては最も盛大で重要な法要である。

もともと「御忌」^{注4}とは天皇や皇后の忌日法要を指していた。大永3年（1523）に知恩寺と知恩院との間でどちらが総本山かをめぐり論争が起こった。

この論争に対し、後柏原天皇（1464～1526）は知恩院を助けるために詔書^{注5}を与えた。



増上寺の御忌大会

この詔書は、元号の「大永」をとって「大永の御忌鳳詔」^{ぎよきほうしやう}といわれる。この詔書には「一七夜法然上人御忌を修せしむべし」との記述があったので、これ以降、法然上人の忌日法要を「御忌」と呼ぶようになったといわれている。

法然上人は建暦2年（1212）正月25日に80歳で亡くなったので、毎年正月25日に法要を行っていた。しかし、この時期は大変寒いので、参集する人々のことも考慮して、明治10年（1877）以降は桜の咲く4月に行われるようになった。



増上寺の雅楽

御忌大会の6日間の期間中はさまざまな行事が行われる。

主なものは次のとおりである。

全国から参集した浄土宗の僧侶による読経の「日中法要」。

梵鐘を合図に100人を超える僧侶と「稚児」を含む300人以上で大門から本堂へ練り歩く「練行列」。



増上寺の舞楽

舞楽奉納80年の歴史を誇る増上寺雅楽会の出仕により、御忌期間中、毎日正午過ぎより大殿前舞台において奉納される優雅な「舞楽」。

注1：^{だいえ}大会とは大きな法会のこと。

注2：^{みまさかのくに}浄土宗の宗祖（創始者）。1133年に岡山県的美作国で生まれ、厳しい修行の末、ただひたすら「南無阿弥陀仏」と唱えれば仏の救済を受ける「称名念仏」の教えを説いた。上人には没後の1697年に東山^{えんこう だいいし}天皇から圓光大師の号が贈られた。

注3：仏教では命日から数えて7日ごとを忌日といい、その日に行われる法要。

注4：祖師や高僧の忌日法要についても使われる場合がある。

注5：天皇の意思を示した文書。

■ 徳川将軍家墓所

増上寺は東京上野の東叡山寛永寺とともに、徳川将軍家の菩提寺であった。

増上寺では昭和20年（1945）3月10日、5月25日の大空襲で多くの^{れいびょう}靈廟が被災し焼失した。その後、昭和33年（1958）から文化財保護委員会が中心となり学術調査が行われ、土葬されていたご遺体は^{だび}茶毘に付された。南北に配していた墓所は一か所にまとめられて安国殿西側（徳川将軍家墓所）に改葬されている。

埋葬されている将軍は、二代秀忠^{ひでただ}、六代家斉^{いえなり}、七代家継^{いえつぐ}、九代家重^{いえしげ}、十二代家慶^{いえよし}、十四代家茂^{いえもち}の六人である。

また、^{すうげんいん}崇源院（秀忠の正室お江の方）や^{せいがんいん}静寛院（家茂の正室和宮）など五人の正室と五人の側室および歴代将軍の子女多数が埋葬されている。

灌仏会（花まつり）

4月8日

灌かんぶつ仏え会は、釈迦しやくかの生まれた日注1を祝う行事である。釈迦の誕生仏に香水（現在は甘茶）を注ぐ注2ため、この名前がある（灌には水をそそぐの意味がある）。仏ぶつ生しょう会え、降ごう誕たん会え、浴よく仏ぶつ会え、竜りゅう華け会えなどとも呼ばれる。誕生仏を花で飾ったお堂（花御堂はなみどう）でまつ祀ることから「花まつり」と呼ばれ、現在ではこの名前で呼ばれることも多い。

灌仏会はインドで起こり、中国では唐や宋の時代に広まったといわれている。

日本で初めて灌仏会が行われたのは、飛鳥時代の推古天皇の御代606年4月8日とされている注3。

『日本書紀』によると、奈良時代には大きな寺院のみで行われていた。その後、平安時代になると年中行事として一般化されたといわれている。さらに、江戸時代になると寺子屋で灌仏会について学んだ子どもたち注4などを通じて、庶民へ広まっていった。

『東京年中行事』（1911年）には、灌仏会で特に賑わう寺院として、芝増上寺が記されている。増上寺では4月8日に大殿前に花御堂を設置し、お堂に、天と地を指差した誕生仏を安置する。参拝者は誕生仏に甘茶を注ぎお祈りをする。



増上寺の甘茶かけ

注1：4月8日である典拠は明らかではない。

注2：生まれた釈迦を竜王が天から注いだ五香の水、または甘露で洗ったとの伝説があるため。

注3：840年の4月8日を最初とする説もある。

注4：江戸時代、寺子屋の教育は大きな影響力を持っていた。

烏森神社 例大祭

5月3日～5日

烏森神社は、天慶3年(940)に藤原秀郷^{ひでさと}^{注1}が桜田村のこの地に勧請^{かんじょう}^{注2}したのが始まりといわれる。天慶3年に乱を起こした平将門を討つために、秀郷が武州の稲荷に必勝祈願をした際に、白狐があらわれ白羽の矢を与えられた。その矢の靈驗(神仏が示す不思議な利益)で速やかに乱を鎮めることができたため、そのお礼に神社を勧請しようとしたところ、夢に白狐が現れ、神鳥の群がる場所が靈地だとのお告げがあった。そこで、無数の鳥が松林に群がっていた桜田村に社殿を創建した。

その後、江戸時代には^{すぎのもり}梶守神社、柳森神社と併せ「江戸三森」として、江戸庶民の信仰を集めていた。

明暦3年(1657)の「明暦の大火」^{注3}では、周辺はすべて延焼したが烏

森神社だけは延焼しなかった。そのため、人々の当社に対する信仰は一層厚くなった。

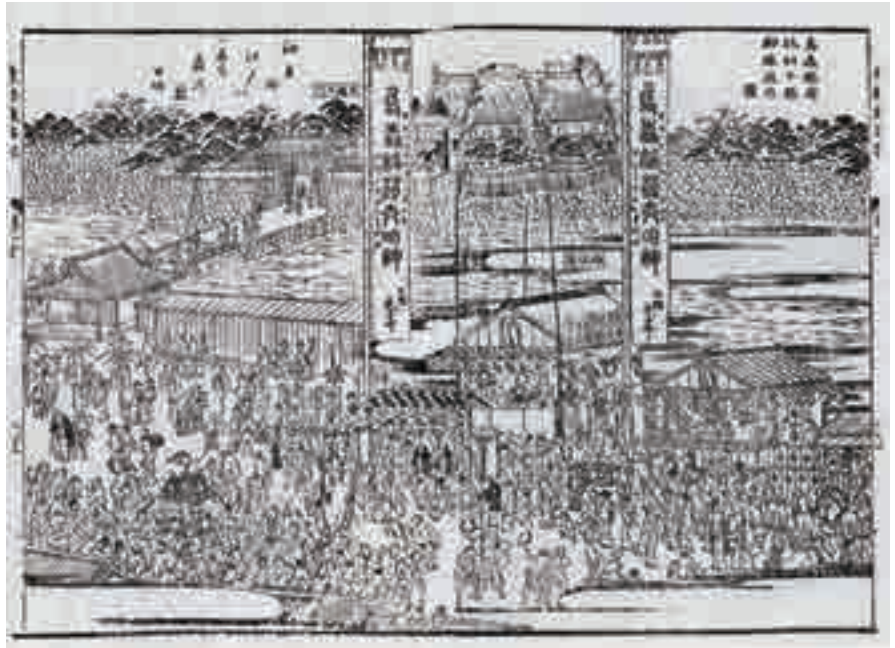
烏森神社は『祠曹雑識』^{しそうざっしき}^{注4}の江戸の稲荷番付では東の関脇に位置付けられていた。江戸時代までは二月初午の日が例大祭であったが、明治時代以降は端午の節句の5月4、5、6日に改めた。これが江戸の夏祭りのはしりとなった。

大神輿は戦前まで^{ごうりき}強力^{注5}によって担がれたが、戦後から昭和28年(1953)までは^{ぎっしゃ}牛車^{注6}に引かれて氏子町を巡幸し、新橋芸妓たちも参加していた。

昭和38年(1963)から交通事情の悪化で^{おおみこしとぎよ}大神輿渡御は中止となったが、昭和49年(1974)に関係者の努力で、氏子による大神輿を担いでの巡幸が再開された。

現在、隔年で開催される本大祭では、JR新橋駅前のSL広場で祭事が厳かに行われる。その後、通称「千貫神輿」と呼ばれる、^{わらびて}四方の蕨手の上に鳥を置いた珍しい神輿が、総勢400人の担ぎ手と共に、新橋界限の赤レンガ通りや烏森通りを渡御する。また、社殿では^{わかやま}若山^{たねお}胤雄社中による里神楽^{注7}が奉納され、この日の新橋は祭り一色となる。

「め組の木遣り」と「大神輿渡御」は新橋の歴史と人々の祭りに込める思いが、初夏に向かう下町の香りを伴い伝わってくるようである。



東都歳事記

注1：平安中期の武将。^{たわらのとうた} 依藤太とも呼ばれる。近江三上山の^{むかで} 百足退治の伝説でも有名。源氏、平氏と並ぶ武家の棟梁として、多くの武将を輩出した。

注2：神仏の分霊を譲り受けお祀りすること。

注3：死者は約10万人といわれ、振袖火事とも呼ばれる。

注4：江戸初期から天保5年（1834）にかけて寺社に関する多様な記事が書かれた文献。

注5：社寺に^{こし} 仕え、輿を担ぐ人。

注6：神様や人が乗る輿を引く場合は「ぎっしゃ」と呼び、荷物を引く場合は「ぎゅうしゃ」と呼ぶ。

注7：宮中で行われる^{みかぐら} 御神楽に対し、民間で行われるもの。



烏森神社の本社大神輿

参考文献 『烏森神社縁起』

■ 本社大神輿

昭和5年11月、名匠と^{うた} 謳われた神田代町の^{みこしし} 御輿師「だし鉄」こと山本正太郎作である。八つ棟型の大神輿（通称千貫神輿）は、蕨手に烏を置き「だし鉄」の最高作ともいわれている。

四面ある屋根の各面に^{きりづま} 切妻が載っている。八つ棟型の神輿は大層珍しく、当社の神輿ほど大きなものは類を見ない。

2年に1度の5月5日、烏森神社から宮出しされた本社大神輿は、新橋駅前から氏子町会を渡御する。



千貫神輿

端午の節句 子どもの日

5月5日

5月5日は端午^{たんご}の節句で、男の子の健やかな成長を願う日である。五節句の一つで、菖蒲^{しょうぶ}の節句とも呼ばれる。

「端^{たん}」は初めを意味し、毎月最初の「午^{うま}」の日が「端午」になった。現在、五月だけに「端午」が残ったのは、以下の理由からといわれている。

古来、中国では、「五」という数字は、一から九までの数字の真ん中であるので不安定な数字とされ、五月は忌月（いみづき・きげつ）といわれていた。このため、あえて「五」が重なる「五月五日」に、忌月の邪気を払い無病息災を祈る日として節句を行うことにした。

また、古来、日本では、田植えが始まる前に、早乙女^{さおとめ}と呼ばれる若い娘が、田の神のために仮小屋や神社にこもり、穢れ^{けが}を祓^{はら}い清める「五月忌み^{さつきい}」があり、これが由来ともいわれている。

なお、端午の節句が菖蒲の節句とも呼ばれるのは、菖蒲や蓬^{よもぎ}の葉の香りは健康を保ち、邪気を祓うと考えられていたからである。当日は、家の軒に菖蒲や蓬を飾り、菖蒲湯に入り、菖蒲酒を飲み、菖蒲枕で眠るといって菖蒲づくしの一日だった。

平安時代以降、端午の節句で使われる菖蒲が、「尚武」や「勝負」に通じるとのことで、男子の行事へと徐々に変化していった。

特に、武家社会である江戸時代では、男子の健やかな成長、立身出世を願う行事として盛んになった。貞享年間（1684～88）頃は、兜人形の内飾りと旗のぼりの外飾りが中心だったが、文政から天保年間（1818～44）になると、精巧な武者人形、小さな鯉のぼり^{注1}へと変化していった。

『東都歳事記』には「端午御祝儀。諸侯御登城。粽^{ちまき}^{注2}献上有。貴賤佳節を祝す。家々軒端に菖蒲、蓬をふく」とあり、将軍から庶民まで幅広く端午の節句を慶賀した様子が書かれている。



東都歳事記

また、端午の節句では柏餅を食べるが、これも江戸時代からの風習である。

柏の木は、新しい芽が出てくるまでは葉が落ちることがないため、「跡継ぎが途絶えることのないように」という子孫繁栄の願いをこめて、柏の葉に包まれた餅を食べる。

現代でも、各家庭では兜や人形が飾られている。The Okura Tokyo のロビーには、大倉家ゆかりの見事な「兜飾り」、愛らしい「勝って兜」「木馬乗」の五月人形（京都の丸兵大木人形店作）が飾られている。

芝地域では各家庭で上げている鯉のぼりを目にする事はなくなったが、東京タワー正面には期間限定で無数の鯉のぼりが泳ぐ。

なお、白金台にある^{せいしょうこう}清正公（^{かく}日蓮宗^{りんじ}覚林寺）の5月4、5日の大祭では^{かちまもり}菖蒲入りの勝守や開運出世祝鯉（紙製の鯉のぼり）が授与される。

端午の節句に菖蒲湯に入り、邪気を祓って無病息災を祈念するのも良いだろう。



大倉家ゆかりの五月人形



東京タワーの鯉のぼり

注1：「鯉が龍門という激流の滝を登って龍になった」という中国の登龍門の故事による。一番上に揚げる五色の吹き流しは、他の龍に食べられないための魔除けである。

注2：粽が食べられる理由は、中国の楚の国の政治家・文学者で愛国者の屈原（紀元前343～紀元前278）が、国の将来を憂いて5月5日に川で入水自殺をした。「彼を慕う民衆が、その亡骸を魚が啄まない様に、餌として^{なきがら}笹の葉で包んだ米を川に投げ入れた」「お供えの米を龍が食べてしまうので龍の嫌いな葉で包むことを屈原の霊が要求した」などの伝説による。



柏餅

日比谷神社 例大祭

5月第2週の金、土、日曜日

江戸時代初期、日比谷神社は旧麹町区日比谷公園の大塚山に鎮座していたが、創建年は不明である。ご祭神は豊受大神とようけのおおかみである。

大塚山に鎮座していた当時は、苦しんでいる旅人たちに社務所を開放し、無病息災の祈願をしたところ、大変な靈験れいげん（神仏が示す不思議な利益）があった。このことにより、旅さ泊ば稲荷と呼ばれるようになった。

慶長11年（1606）に、江戸城築城に際して日比谷御門を造営することになり、芝口の日陰町（現在の新橋駅南口付近）に移転した。

ここでは、虫歯に苦しむ人々が、鯖さば断たち注1して祈願したところ、またもや大変な靈験があったので、鯖の字をあて鯖神社と呼ばれるようになった。



新撰東京名所図会

その後、昭和3年（1928）に都市計画区割整理により旧愛宕下町二丁目（新橋四丁目）に移転。さらに平成21年（2009）に都市計画道路（環状2号線）の建設により現在の地である

東新橋二丁目に移転した。

日比谷神社の大祭は、現在、5月第2週の金、土、日曜日の3日間行われ、神輿巡行は近くにある烏森神社と1年交代で行われる。江戸時代から行われている神輿巡行は、新橋四丁目、五丁目町会の二基の神輿が連合し、これに住民も参加して祭りを大いに盛り上げる。



新橋四丁目町会神輿

また、日比谷神社では大祭以外にも1月は「元旦祭」、2月は「節分祭」「初午祭」、6月は「夏越の祓^{なごし ほうらい}」、12月は「年越の祓^{としこし ほうらい}」が行われる。



日比谷神社例大祭

過去3回の遷宮を経て、現在、日比谷神社は、高層ビルを背景に新橋、汐留地域を見守る位置に鎮座^{ちんざ}しており、日頃から参拝者の姿が絶えない。

注1：神仏に願掛けをした際に、自分の好きな食べ物や嗜好品^{しこうひん}などを断つこと。断つものは、信仰上避けるべき「酒」「たばこ」や、臭いのきつい「鯖」などであった。

■ 絵馬

奈良時代の『続日本紀^{しよくにほんぎ}』には神の乗り物としての馬、神馬^{しんめ}を神社に奉納したと記されている。馬を奉納できない者は、木や紙に馬を描き代用した。江戸時代頃からは家内安全、商売繁盛等の願いを絵馬に記して奉納する風習が伝わっている。日比谷神社鯖稲荷の絵馬には鯖が描かれている。(現在は授与されていない)



鯖の絵馬

御穂鹿嶋神社 例大祭

6月10日に近い土、日曜日

御穂鹿嶋神社では毎年6月10日に近い土、日曜日に、氏子と地域の人々の無事と平和を祈願して例大祭が行われる。隔年の日曜日には宮神輿が出て、200人以上が担ぎ手として繰り出し、氏子町内を渡御する。宮神輿は午前8時半に宮出し、各町内で担ぎ手が交代し、午後3時半頃に宮入をする。なお、宮神輿巡行の前日には、本芝町会^{注1}の子ども用の山車が100人以上の子供たちに曳かれて賑やかに巡行する。

御穂神社と鹿嶋神社は、江戸時代から本芝地区の鎮守として「本芝両社」と呼ばれていた。平成16年(2004)には、社殿の老朽化や地域の再開発により、合祀され「御穂鹿嶋神社」となり、平成18年(2006)には現在地(鹿嶋神社の社地)に新社殿が造営されて遷座した。

御穂神社の創建は室町時代の大永5年(1525)といわれている。その起源については二つの説がある。

一つは、駿河国三保(三保の松原辺り)から移り住んだ漁民が、故郷の氏神「御穂(三保)神社」を勧請^{注2}したという説。

もう一つは、祭神である藤原藤房^{注3}に由来する。大永5年(1525)頃、都から来た翁が芝浜に移り住み、小さな漁村であった当地に「忠孝の義」の教えを広めた。翁の死後にも、漁民が翁の高い徳を慕い、その住居跡に宮所を設けて祀った。なお、御穂神社の名前は、翁が漁民に「濤の明神」を崇めるように説いたからといわれている。後に、この地を訪れた公家により、その翁が藤原藤房である可能性が高いと指摘され、それ以降は藤原藤房卿を祭神として崇めるようになった。



御穂鹿嶋神社前の神輿



江戸名所図会

『芝區誌』は「三保神社」説、『東京都神社名鑑』は「藤原藤房」説を採っている。

一方、鹿嶋神社は寛永年間（1624～44）の創建といわれている。

ある日、常陸国一之宮の鹿島神宮に鎮座していた一社の祠が芝浜の当地に漂着した。一旦は常陸国の鹿島神社に戻されたが、再びこの地に漂着し、その際に「この浦に鎮まり坐すべし」との神託があったことから、この地で祀られることになったという。そのため、鹿島神宮と同じく武甕槌神たけみかづちのかみが祭神である。

このように古くからの歴史と由緒を持つ御穂鹿嶋神社の例大祭は、氏子たちや地域の人々の結束を高める重要な役割を担っている。

注1：現在の芝四丁目全域と芝五丁目の一部。

注2：神仏の分霊を譲り受けお祀りすること。

注3：藤原藤房の別称は万里小路藤房までのこうじふふさ。鎌倉時代末期から南北朝時代にかけての公卿で後醍醐天皇の側近。1332年、後醍醐天皇の倒幕運動に参画したために常陸国に流される。のちに復権して建武政権の要職を務めるが、突如、出家して、上野国こうずけのくに（群馬県）、下野国しもつけのくに（栃木県の一部）を旅した。江戸時代の儒学者安藤省菴あんどうせいあんにより、平重盛、楠木正成とともに日本三大忠臣の1人に数えられている。

■ 落語「芝浜」

落語の人情噺ばなし『芝浜』は御穂鹿嶋神社近くの浜が舞台となっている。名人といわれた三遊亭圓朝が、客にその場でもらった題目三つ「酔っ払い」（人物）、「芝浜」（場所）、「革の財布」（品物）を織り込んで即興で演じた話といわれている。魚屋勝五郎が拾った大金の入った革財布をめぐる夫婦の絆の話『芝浜』は、聞く人の心に届く名作である。

6月

みなづき

水無月

千日詣り ほおづき縁日 愛宕神社

6月23日、24日

毎年、6月23日と24日の2日間、愛宕神社では「千日詣り」「ほおづき縁日」が行われる。

一般的には「ほおづき」と書くが、愛宕神社では「ほおづき」と書く。

この「千日詣り」は、昔からこの日に参拝すれば、千日分のご利益があると信仰されている。また、社殿前に設けられた茅ちの輪わをくぐることで、罪けがや穢はられを祓い、無病息災、延命長寿のご利益を授かるといわれている。



茅の輪くぐり

同時に開催される「ほおづき縁日」では、お祓いされた青いほおづき注1が境内けいだいに並ぶ。山東京山の『蜘蛛の糸巻』注2によると、芝せいしやうじの青松寺門前の武家屋敷ちゆうげんに奉公する中間しやく（使用人）が「6月24日の功德日に青ほおづきの実を愛宕の神前で丸呑みにすれば、大人は癩しかくの種（胃痛）を切り、子どもは疳かんの虫（癩癧）を封かんしゃくずるといふ愛宕権現のお告げ」の夢を見た。翌朝、庭で一株の千成りほおづきを見つけ、この話を吹聴したところ、不思議と効能があった。そ



ほおづき市

のため「靈験あらたかな愛宕のほおづき」として、約200年前から青ほおづきの市が境内に立つようになった。今では、浅草など各所で開かれるほおづき市は、愛宕神社の縁日が発祥である。なお、愛宕神社のほおづきは、業者による販売ではなく、神職がお祓いしたものをお頒わけしている。

現在でも、「千日詣り」「ほおづき縁日」には多くの人を訪れる。江戸情緒あふれる初夏の縁日を楽しむのも風情がある。

注1：ほおづきは漢字で「酸漿」または「鬼灯」と書かれるが、「酸漿」は生薬の名に由来し、「鬼灯」は火がきらきらと灯った提灯に似ていることに由来する。

注2：1846年に、著名な戯作者、浮世絵師であった山東京伝の弟である山東京山によって書かれた風俗や雑事の随筆。

夏越の祓

6月晦日

大祓は、身体おほほらいの穢れけがを祓はらうための禊みそぎの行事で、6月晦日と12月晦日に行われている。

6月の大祓は「夏越の祓」といい、半年分の穢れを祓い、その後の半年の健康と厄除けを祈願する。これは人間は生きてると、知らない内に罪を犯して穢れが付くと考えられていたからである。その由来は、毎年6月、12月の晦日に奈良時代から宮中で行われた祓が民間に広まったものといわれている。

本来、穢れを祓うためには、海水に浸ったり、水を浴びて心身を清める。しかし、平安時代には、紙で「形代かたしろ」を作り、「形代」の身を撫で息を吹きかけて、穢れを「形代」に移した後に水に流す（または神社に奉納する）方法に変わっていった。

また、夏越の祓では「茅ちの輪わくぐり」も行われる。

多年草であるイネ科の茅かやで作られた巨大な輪を、左足から踏み出して、左回り、右回り、左回りで「8」の字を描くように3回くぐり抜けると穢れが祓われるといわれている。

茅の輪の由来は『備後風土記』^{注1}に以下のように記されている（様々な説話がある）。

蘇民将来^{注2}は貧しかったにも関わらず素戔嗚尊^{注3}に自分の家を宿として提供した。素戔嗚尊はそのお礼に蘇民将来の子どもたちに茅で作った輪を付けるように指示して疫病から守った^{注4}。

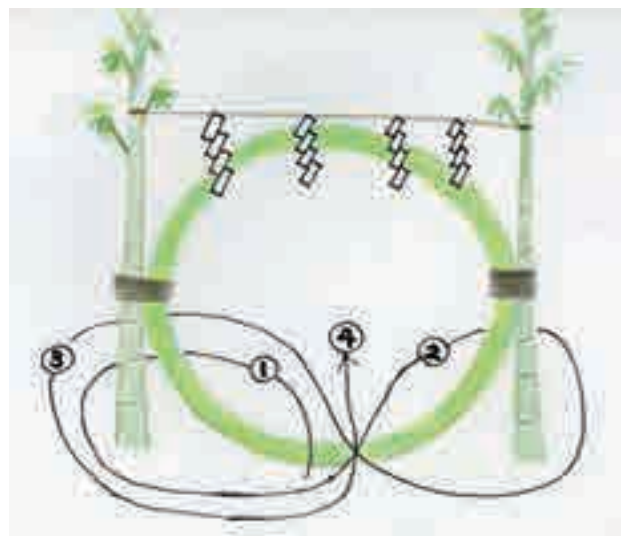
また、江戸時代には、芝地域でも芝神明宮やその他の神社で「茅の輪くぐり」が行われていたことが『東都歳事記』に記されている。

現在、芝地域では、愛宕神社、芝大神宮、御田八幡神社、三田春日神社、日比谷神社、西久保八幡神社、御穂鹿嶋神社みほかしまじんじゃなどで茅の輪くぐりが執り行われている。

この行事の由来を知って、茅の輪をくぐってみると、昔の人々の思いを身近に感じる事ができるのではないだろうか。



形代



茅の輪のくぐり方

注1：広島県東部の風土記。

注2：日本各地に伝わる説話上の貧者。

注3：天照大神あまてらすおおみかみの弟で八岐大蛇やまたのおろちを退治した。

注4：この伝説に基づく民間信仰や「護符」そのものを指すこともある。京都の八坂神社では、祇園祭の期間に「蘇民将来子孫也」と記した厄除粽ちまきが授与される。

■ 水無月

その昔、宮中の人々は氷室ひむろ（京都衣笠山西麓）から氷を取り寄せ、氷を口にして暑気払いをした。貴重な氷は一般大衆の手に入りにくかったため、麦粉を練って氷片になぞらえて食べたのが水無月みなづきである。水無月の三角形は氷室の氷片を表したもので、上の小豆の赤い色には悪魔払いの力がある。夏の酷暑を乗り切り、無病息災を祈願するお菓子である。



水無月

7月7日の七夕は、笹竹^{注1}に結んだ短冊に願いを^{しる}記し、星に祈る日であり、五節句の一つである。別名、笹の節句と呼ばれる。

七夕^{注2}は五節句の一つで、「中国の牽牛と織姫の二星を祭る伝説」と「日本の棚機津女の伝説」が奈良時代に一緒になり、現在の「七夕まつり」が生まれたと考えられている。

中国には「夫婦であった牽牛と織姫が天帝の機嫌を損ねて、天の川をはさんで引き離され、一年に一度だけ、7月7日の夜に天の川に架かる橋で会うことを許された」という伝説がある。

そして、日本には「村の災厄を除いてもらうため、棚機津女が機屋にこもって、天から降りてくる神の一夜妻になった」という伝説があり、この二つの故事が一緒になり、宮中の行事「乞巧奠」^{注3}となった。



名所江戸百景



東京名所四十八景

江戸時代には寺子屋教育^{注4}に七夕が取り入れられたため、穢れを祓う心願成就の年中行事として庶民に普及した。

江戸時代より前には梶の葉に歌を書いて、星に手向ける習慣があったが、江戸時代に入ると短冊や色紙に願い事を書いて竹に結ぶようになった。

短冊や色紙以外にも、西瓜^{すいか}、硯^{すずり}、筆、算盤^{そろばん}、大福帳等の張りばて、ほおずきなどを竹に結んで飾った。西瓜やほおずきは、家に戻ってくる先祖の霊へのお供え物といわれる。硯と筆は学問向上、算盤と大福帳は商売繁盛の願いが込められている。

広重の『名所江戸百景』にも空いっぱい七夕竹の林立する江戸の町が描かれている。芝地域では、昇齋一景の『東京名所四十八景』に、飯倉四ツ辻の七夕が描かれている。

また、7月7日にはそうめんを食べたり^{注5}、井戸浚い^{さら}をする習慣もあった。

現在、港区では、増上寺やホテルのロビー、幼稚園、小学校などで短冊を結んだ竹が飾られているが、個人の家で飾られることは少なくなっている。



増上寺の七夕飾り

注1：笹竹は天にまっすぐに伸びることから、願いも天にまっすぐ届くようにとの思いを込めている。

注2：「七夕」は五節句の一つとして扱う場合は「しちせき」と呼ぶ。

注3：もともとは、織姫を祭ることから、女子が手芸・裁縫などの上達を祈った。後には七夕の行事をさすようになった。

注4：寺子屋では、芋の葉の露を硯に入れて墨をすり、書の上達を祈願した。

注5：古代中国で、7月7日に死んだ帝の子が鬼神となって疫病を流行らせた。その子の好物の、縄に似たお菓子の「索餅」^{さくべい}を供えると疫病は治まった。その故事から、7月7日に索餅を食べると、1年間無病息災で過ごせるという中国の風習がある。日本では、索餅と似ているそうめんに変わって、この風習が伝承された。



索餅

御田八幡神社 大祭

8月第1週

御田八幡神社では、毎年8月第1週に4日間、氏子、地域の人々の健康と幸福を祈願して大祭が開催される。

1日目は宵宮祭で、御神霊ごしんれいを御神輿みこしにお祀りまつする祭儀まつりが執り行われる。

2日目は例祭で、神社にとって年に1度の最も重要な祭儀であり、神職かみにより神事かみごとが厳粛げんしゆくに執り行われる。

3日目は巡行祭で、御神輿みこしが氏子町内を巡行する。まず、境内で神主かみによって祭儀まつりが執り行われる。次に、御神輿みこしはトラックで、神職かみや神社世話人かみづかひとともに氏子町内を巡行する。

4年に1度、御神輿みこしは木遣りきやり、おはやしおはやしに導かれ、第一京浜へ繰り出す。悠然と歩く猿田彦さるだひこを先頭のぼりに、幟のぼりを持った神職かみ、そして巫女みこ、神主かみ、氏子の列りゆうの後に「よいさ」の威勢いせいの良い掛け声とともに御神輿みこしが続く。

4日目は演芸披露で、地元の御田小学校の子どもたちによる御田太鼓の演奏など様々な演芸が神楽殿で披露される。



2017年の御田八幡神社 大祭



2019年の御田八幡神社 巡行祭

御田八幡神社は、和銅2年(709)に東国鎮護の神社として牟佐志国の牧岡むさしのくに(現在の白金付近)に創建され、寛弘8年(1011)に現在の三田一丁目付近に移転した。この地は嵯峨源氏渡辺一党の領地だったといわれ、当社は渡辺一党の氏神うぢがみ^{注1}として尊崇され、渡辺一党で一番勇猛といわれた渡辺綱わたなべのつな^{注2}の名前を取って綱八幡と称した。

寛永5年(1628)に現在の三田三丁目に遷座した。『江戸名所図会』では、東海道をはさんで江戸湾に臨む当社の姿と石段が描かれており、江戸時代の鉄製天水桶や狛犬、百度石などの石造物が現存する。

その後は明治2年(1869)に稗田神社ひえだじんじや、明治7年(1874)には三田八幡神社と名前を変え、明治30年(1897)からは現在の御田八幡神社注3と称している。また、現在、御田八幡神社は三田、芝地域、芝浦三、四丁目、港南全域、高輪一、二丁目の広い地域を護っている。

昭和20年(1945)5月の空襲で社殿は焼失したが、昭和29年(1954)に再建された。

また、当社は高輪台地きわの際に立地しているため、自然湧水ゆうすいに恵まれ、石段横の龍頭口からは今でも湧水が出ている。



江戸名所図会

注1：一族の守り神。三田にある元神明宮は渡辺綱の産土神うぶすなかみ（その人の生まれた土地を守る神。他所に移住しても一生守ってくれる）。

注2：源頼光の家臣で、頼光四天王の一人。数々の鬼退治で知られる勇猛な武将。三田付近は嵯峨源氏渡辺一党の領地だったといわれ、渡辺綱の生誕もこの地であったとの伝説がある。綱坂、綱の手引き坂も渡辺綱が由来となっている。

注3：御田は、「みた」「おんでん」などとも読み、寺社や皇室などが所有する領田のこと。

8月

はづき

葉月

西久保八幡神社 神幸祭 例大祭

8月中旬

西久保八幡神社では、毎年国家の安寧はもとより、氏子の健康と幸福を祈念して8月中旬に例大祭^とが執り行われる。昭和20年(1945)3月の東京大空襲で社殿および神輿^{しんよこ}庫などを焼失し、平成27年(2015)8月に氏子の総意により70年振りに復興した御本社神輿^{みこし}が氏子地域を巡行した。平成29年(2017)8月11日には、戦後初めて復興した御本社神輿^{しんこうさい}の神幸祭が行われた。この年の参加者は700人以上にも及んだという。

また、令和元年(2019)8月11日には天皇陛下の御即位をお祝いして盛大に神幸祭が執り行われた。神職による御本社御輿^{はら}のお祓い^{たかはりちょうちん}が終わると、氏子町会の高張提灯^{注1}を先導に箕輪囃子、氏子総代等が列をなし、^{みのわばやし}逞しい担ぎ手たちにより神輿が氏子町内を練り歩いた。なお、令和2年からは毎年神幸祭が執り行われる。



西久保八幡神社の神幸祭

祭りの歴史については、天保9年(1838)の『東都歳事記』に「別当普門院 毎年神輿^{うぶこ}産子の町を渡し 西久保大通りへ御旅所^{おたびしょ}を儲けて13日より御旅出あり 今日放生会^{ほうじょうえ}^{注2}をなす 町々より隔年 踊り ねり物を出す事 丑卯巳未西亥の年なり」と記されている。また、先代の御本社神輿はその大きさゆえ、戦前の祭礼では牛車^{ぎっしゃ}^{注3}が神輿を引いていたという。

西久保八幡神社は寛弘年間(1004~12)頃に、源頼信が氏神と仰ぐ京都男山石清水八幡宮の神霊^{かんじょう}を勧請^{注4}し、霞ヶ関辺りに創建された。その後、太田道灌の江戸城築城に際し、現在の地に遷された。慶長5年(1600)に徳川二代将軍秀忠の正室、お江の方が関ヶ原の戦いの必勝祈願を当社で行った。寛永11年(1634)に三代将軍家光が、徳川家勝利の御礼と母の思いに^{こんりゅう}応え宮社を建立した。江戸時代までは八幡山普門院と称していたが、明治元年(1868)の神仏分離令で八幡神社となった。

令和2年3月現在、氏子地域の虎ノ門一丁目から五丁目、六本木一丁目周辺では大規模開発が進んでおり、今後、町の景色も大きく変わっていく。新しく住民となる人たちも、是非、地元の行事に参加して楽しんでほしい。

注1：高張提灯には旧町名の琴平町、巴町、神谷町、八幡町などが書かれている。

注2：仏教の殺生を禁ずる考えに基づき鳥獣や魚を放つ行事。

注3：神様や人が乗る輿こしを引く場合は「ぎっしゃ」と呼び、荷物を引く場合は「ぎゅうしゃ」と呼ぶ。

注4：神仏の分霊を譲り受けお祀りすること。



「ウん (うん)」



「あ (あ)」

西久保八幡神社の狛犬

■ 八幡神社

『新撰東京名所図会』によると「西の久保八幡神社は、八幡町 23 番地に鎮座す、愛宕山の西域山の一脈、巍立したる丘上、芝給水工場の高臺と相對峙せり。老樹蔚蒼、境内、神寂びたり。登路二條、飯倉より虎ノ門に通づる市街の間よりす。男坂は石磴四十八級、鐵鎖を施せり。 當社は、京都石清水八幡宮の分魂にして、寛弘年間、多田満仲の四男、鎮守府將軍源頼信朝臣、創めて此地に勸請す。」との記載がある。

8月

はづき

葉月

幸稻荷神社 例大祭

8月14日、15日

^{さいわい}幸稻荷神社では、毎年8月14日、15日に氏子と地域の人々の無事と平和を祈願して、例大祭が行われる。例大祭では、お祓いをした後に本殿の御扉^{みとびら}が開かれ、神職の手でお供え物が捧げられる。そして、これまでの一年間の無事感謝し、これからの一年間の平和をお祈りする。

幸稻荷神社は応永元年（1394）に武蔵国豊島郡岸之村（現在の芝大門付近）の鎮守として勧請^{かんじょう}^{注1}され、岸之稻荷と称していた。その後、増上寺山内に遷座した。また、寛永年間（1624～44）には府内古社十三社に定められ、東京で最も古い神社の一つと伝わっている。



幸稻荷神社例大祭



東京名所図会

宝永元年（1704）に、氏子や信者たちに幸運なことが続出したために、幸稻荷と改められた。

さらに文化8年（1811）に現在地に遷座された。

明治時代の神仏分離で、増上寺内に鎮座していた熊野神社、茅野天満宮、松野天満宮、瘡^{かさ}もり護神社^{注2}、金地院内に鎮座していた稲荷神社、三峯社が合祀された。

昭和20年（1945）に東京大空襲で社殿が焼失し、昭和35年（1960）に再建された。

昭和33年（1958）に東京タワーの地鎮祭を行ったのは幸稻荷神社である。東京タワーメインデッキ（大展望台）の2階にある東京タワー大神宮の5月の例大祭も幸稻荷神社が奉仕している。

注1：神仏の分霊を譲り受けお祀りすること。

注2：現在も社殿に「幸神社」と「瘡護神社」の2社の扁額へんがくが掲げられている。「瘡護神社」は腫れ物や出来物の治療に御利益があるといわれ、祈願の際には土の団子を供え、平癒へいゆしたら米の団子を供える風習があった。



扁額

■ 東京タワー大神宮

昭和52年（1977）、日本電波塔株式会社開業20周年を記念して大展望台2階に「東京タワー大神宮」が建立された。東京23区内で一番高い150メートルの高さに上がることから「成績も上がるように」と多くの受験生が合格祈願に訪れている。



幸稲荷と東京タワー

『東京タワー 99 の謎』 日本電波塔研究会著

8月

はづき

葉月

お盆

8月15日(旧暦7月15日)

お盆は正式には盂蘭盆会うらぼんえといい、先祖の霊まつを祀る行事である。

明治5年(1872)に旧暦(太陰暦)から新暦(太陽暦)に改暦されたことにより、7月15日に行う地域と8月15日(旧暦の7月15日)に行う地域注1がある。

ある日、釈迦の弟子の目連もくれんが、地獄の餓鬼道注2で逆さ吊り注3にされて苦しんでいる母親を救う方法を釈迦に相談した。釈迦の教えに従い「7月15日に僧侶に食べ物を差し上げて、供養ほうえの法会を行い母親を救った」という伝説から、この日にお盆の行事が行われるようになった。

今では、お寺の存在なしでのお盆は考えられないが、仏教には本来、祖霊崇拝の要素はない。日本の古来からの祖霊崇拝と親を救った仏教の伝説が結びつき、お盆の原型が出来たといわれている。

お盆の歴史は、606年に推古天皇によって執り行われた七月十五日齋会さいえ注4まで遡る。その後、天平5年(733)に聖武天皇により盂蘭盆供養が執り行われ、以降は宮中の年中行事として定着していく。

江戸時代になるとそれまで高価だったロウソクが、庶民にも手が届くようになったことも、お盆の行事が広がった理由といわれている。

江戸の人々はマコモ(イネ科の多年草)、竹、筵むしろ、蓮はすの葉などでご先祖様を迎えるための盆棚(精霊棚)を作った。地域によって異なる。



盆棚(精霊棚)

13日の夕方には、ご先祖様の霊を迎えるために門口で「おがら」注5を焚く。これは、ご先祖様の霊が迷子にならないための目印となる「迎え火」である。その際に、早くこの世に

来て欲しいとの思いから瓜で馬を作る。また、14、15日には、僧侶にお経をあげてもらう。15、16日には、ご先祖様の霊が無事にあの世へ戻れるように迎え火と同じ場所で「送り火」を焚く。その際に、あの世にゆっくり帰って欲しいとの思いから^{なす}茄子で牛を作る。

お盆が終わると供え物は川に流した。江戸時代の商人の河村瑞賢は、品川に流れ着いた瓜、茄子を拾い、漬物^{ずいけん}を作って売り、そのお金で木材を買って材木商として成功したといわれている。

京都の「五山の送り火」は、ご先祖様の霊（精霊^{しょうらい}）をあゝの世（冥土）へと送る行事である。精霊は送り火を見ながら冥土へ戻っていき、人々は送り火を拝みながらご先祖様を想う。従って、京都では各家で送り火を焚かない。

また、迎え火、送り火は焚かず、提灯を灯して菩提寺のお墓まで行き、ご先祖様の霊をお迎え、お送りする地域もある。

なお、盆踊りも、ご先祖様の霊を送るための習わしといわれる。



五山の送り火

お盆は故郷に帰って、ご先祖様に思い^{はせ}を馳る良い機会ではないだろうか。

注1：改暦直後は、都市部では新暦、農村部では旧暦が多かった。これは新暦の7月15日が農繁期だったのが理由といわれている。また、現在では、旧暦7月15日（現在の8月15日）の方が、子どもの夏休みや夏季休暇に重なり帰省にも便利なので、お盆は旧暦で考えている人が多い。

注2：常に飢えと渇きに苦しみ鞭打たれる世界。

注3：「逆さ吊り」をサンスクリッド語でウランバナといい、これが盂蘭盆会の語源とされる（諸説あり）。

注4：僧侶に食事を出す法会。

注5：芋殻^{おがら}と書く。麻の茎の皮を剥いて干したもの^さ。麻は空間を浄める聖なる植物とされる。

盆踊り

8月

盆踊りはお盆の期間中に、主に地域単位で行われる踊りの総称である。今では全国各地の夏の風物詩となり、浴衣を着て、夕涼みがてらに楽しく踊り、地域住民の親睦を深める行事として定着している。

本来は、盂蘭盆会うらぼんえの間に、この世に戻ってきた精霊の供養のために行われた踊りである。

盆踊りには、阿波おどり（徳島県）、おわら風の盆おわらのかみ流し（富山県）などの踊りながら地域内を集団で練り歩く「群行式（行列踊り）」と、郡上おどりぐじょう（岐阜県）などのやぐらを中心にしてその周りを踊る「和踊り式」の形式がある。また、その両方の形式で踊る新野盆踊りにいの（長野県）は、盆踊りの古い形式を残している。

盆踊りは、鎌倉時代に時宗の開祖である一遍上人いっぺんしょうにんが広めた「念仏踊り」が始まりといわれている。室町時代になると、その念仏踊りに盂蘭盆会の行事が結び付き、鉦かね、太鼓はやで囃しながら踊るようになる。さらに江戸時代には唄、三味線なども加わり、娯楽性に富んだ現在の盆踊りの原型ができた。

江戸時代後期の風俗を描いた『江戸府内えどふない絵本風俗往来えほんふうぞくおうらい』には、「此盆踊は市中他にあることを聞かず 芝久保町に溝口侯の邸亭あり芝愛宕下に牧野侯屋敷ありて 両侯とも御国は越後なり 又芝増上寺山中にて俗勤めをなすもの越後人八九分なり 又其他増上寺辺には越後の国より出し人多く去ば七月十四五 十六の三夜路上に相集りて盆踊りをなす……（中略）……此踊は芝大門前並に西久保広小路のみ外にあることなし」との記載があり、芝地域でも越後（新潟県）出身者による盆踊りが行われていたことがわかる。このように盆踊りは、江戸へ移った地方出身者が、仕事が休みになるお盆に同郷人との親睦のために踊ったともいわれている。



江戸府内絵本風俗往来



増上寺の盆踊り

現在では、お盆の期間に限らず、増上寺や各商店会、各町会・自治会等の主催で、誰でも参加できる行事として各所で行われている。

なお、現在の盆踊りは、当地の^{すた}廃れた盆踊りの曲を発掘する活動^{注1}がある一方、世代間交流を目的にヒップホップ^{注2}やアニソン^{注3}で踊る盆踊り大会の実施など、多様化を見せている。

注1：港区では、この活動のために北島由記子氏が主宰する「人と地域を元気にする盆踊り実行委員会」「港区発掘ご当地曲盆踊り大会」がある。

注2：政治や社会問題などに対する自己主張の強い歌詞に節をつけたラップ、それに合わせて踊るブレイクダンス、ファッション、ディスクジョッキーなどを総称したもの。

注3：アニメソングの略。アニメ作品で使用される音楽。



六本木ヒルズの盆踊り

参考文献

『週刊 江戸 29』 ディアゴスティーニ・ジャパン

二十六夜待ち

8月下旬(旧暦7月26日)

古来からの信仰の中で、「月待^{つきまち}」という信仰がある。これは特定の日に眠らないで月の出を待って拝む行事である。「十三夜待ち」「十九夜待ち」「二十三夜待ち」「二十六夜待ち」があった。

旧暦の1月26日と7月26日の夜には、月とともに阿弥陀三尊（阿弥陀、観音、勢至^{せいし}）が出現するといわれ、その夜に人々は月の出を待って拝んだ。これが二十六夜待ちである。

港区の愛宕山、芝高輪から品川周辺、その他に神田明神、湯島天神、九段坂などの地域で、二十六夜待ちの行事が盛んであった。

戸田茂睡^{もすい}^{注1}による江戸時代前期の「紫の一本^{ひとつもと}」という仮名草子^{注2}にも「正月二十六日の夜 七月二十六日の夜 月の曙方に出させ給う時 海中より竜灯あがるを此御門の台にて拝んとて 右の夜には貴賤男女群れ集て念仏を申 題目をとえ 経をよみ おもいおもい夜をあかす」とある。

芝の愛宕山の腰掛茶屋でも二十六夜だけは夜の更けるまで、客の相手をする事が許され、大いに賑わった。正月の二十六夜は寒さが厳しいため、七月の二十六夜だけに月待ちが行われた。二十六夜待ちの浮世絵の多くには満月が描かれているが、実際は三十日月^{みそかづき}であった。

『東都歳事記』にも「芝高輪 品川此両所を今夜盛観の第一とす 都下の歌い妓 幫間^{ほうかん}^{注3}



三十日月



東都名所高輪廿六夜待遊興之図

女伶^{じょれい}^{注4}のたぐい 群をなして此地に集う……」とある。この夜は「民間信仰の場」と「夜を徹して遊ぶ娯楽の場」が結びつき大いに賑わった。

しかし、その賑わいも、天保の改革（1841～43）による規制を受けて急速に^{すた}廃れ、現在では行われていない。

注1：江戸時代前期の歌学者（1629～1706）。

注2：仮名、または仮名交じり文で書かれた小説類。

注3：太鼓持ち。

注4：女役者。

参考文献

『日待、月待、庚申待』 飯田道夫 人文書院

■ 賑わう屋台

『東都名所高輪廿六夜待遊興之図』（広重）の絵には茶店、寿司、団子、天婦羅、蕎麦、麦湯、汁粉、^{ほおずき}鬼灯、イカ焼き等の屋台が描かれている。広重は高輪の光景を江戸名所の一つに選んだ。江戸庶民は遅い月の出を屋台等で飲食しながら楽しんだ。

■ 寿司屋

江戸でにぎり寿司が現れたのは文化年間（1804～18）頃で、本所の華屋与兵衛が始めたといわれている。それまでは京坂（阪）と同じ押し^{すし}鮓であった。ネタは卵、刺身、^{こはだ}小鰭で値段は一貫8文（約260円）で、安いものではなかった。

■ 天婦羅屋

江戸に天婦羅屋が現れたのは安永年間（1772～81）頃である。当時は串刺しの天婦羅もみられた。芝浜で取れた芝海老の天婦羅は江戸っ子に大人気であった。当初、天婦羅は立ち食いの屋台で食すものであった。

■ 二八蕎麦屋

二八蕎麦の語源は「二八が16文という値段を表す」という説と「蕎麦粉8に対して小麦粉2という比率を表す」という説がある。夜に商なう蕎麦屋を夜鷹蕎麦といい、深夜の町を風鈴を鳴らして歩いていたので風鈴蕎麦とも呼ばれた。

9月

ながつき

長月

三田春日神社 例大祭

9月9日に近い金、土、日曜日

三田春日神社の例大祭は、「ハレの日」として、氏子と地域の人々の健康と幸福を祈願して、9月9日（重陽の節句）に近い週末に行われる。神社を中心として神職と氏子が一体となって行われ、春日大社の神職が来て祭りに参加する。地元から離れた人々に「祭りだから帰りたい」と思われるような「都市型で上品な祭り」を目指している。

三年に一度、本祭が行われ、本社神輿みこしが氏子各町とぎよを渡御する。本祭を行わない年の陰祭りでは、各町会の町神輿が町内を練り歩く。氏子地域は三田二丁目から五丁目（旧芝三田一丁目から四丁目、芝三田台町一丁目から三丁目、芝三田綱町、芝三田松坂町、芝三田豊岡町の区域）、芝三丁目、五丁目（旧芝三田四国町、芝三田同朋町の区域）である。

本祭は、神社の階段下の敷地内で本社神輿を中心に神事が3日間行われる。金曜日の午後6時から宵宮祭よいみやまつり、土曜日の午前11時からは大祭、長寿祭、日曜日の午前9時から本社から本社神輿の各町への渡御が行われる。氏子地域に渡御するために、三田通りに繰り出した神輿が東京タワーと一体化する景色は他に見られず、非常に見応えがある。また、本社神輿の渡御には各町会から担ぎ手が集まる。



桜田通りの御輿

陰祭りでは、町神輿が各町内を「セイヤ、セイヤ」の掛け声で練り歩き、社殿でのお祓いを受ける。中には神社の急な階段を上り下りする神輿もあり、これも見応えのあるものとなっている。

神輿の担ぎ手は、氏子や地域の人々のほかに、氏子でもある慶應義塾大学の学生、近隣企業の社員など様々である。イタリア大使館、オーストラリア大使館の人々も担ぎ手として参加し、国際交流に一役買っている。また、子ども神輿を出す町会もある。

三田春日神社の創建は古く、平安時代に遡る。天徳2年（958）に武蔵国の国司さかのぼに任命された藤原正房が、藤原氏ならびに皇室外戚の氏神である奈良の春日大社第三殿に祀る天児屋根命あめのこやねのみことを、現在の目黒区三田に勧請かんじょうしたのが始まりとされる。

その後、室町時代の天文年間（1532～55）に現在の港区三田の地せんざに遷座された。

江戸時代に入り、江戸府内で唯一の春日社のため、代々の将軍をはじめ大名家や地域の人々に崇められた。9月9日の例大祭は重陽の節句とも重なるため、徳川家や諸大名から白木の三宝^{注2}に熨斗^{のし}と菊花一枝が奉獻^{注3}された。また、直会^{なおらい}^{注4}で菊酒^くを酌む神事には、多くの参拝者が集まり、江戸末期まで江戸名物の一つとして大いに賑わった。

『江戸名所図会』には、広大な境内と立派な社殿が描かれている。建物は全て檜造り^{ひのき}で見事な彫刻が施された素晴らしいものであったが、文化3年（1806）、芝車町（高輪二丁目）から出火した大火^{注5}で焼失した。また、再建された建物も昭和20年（1945）の東京大空襲で焼失してしまう。

その後、昭和34年（1959）に社殿が再建され、平成5年（1993）には三田通りの拡張に伴い、社務所を新築して現在に至っている。

祭り囃子^{ばやし}に胸を躍らせたことは、子どもの頃の楽しい思い出として残っている。現在や未来の子どもたちにも、この楽しさを伝えていきたい。

注1：神仏の分霊を譲り受けお祀りすること。

注2：神様への供物を載せる台。

注3：謹んで献上すること。

注4：神社の祭祀の最後に、神事の参加者でお酒やお供え物を頂くこと。

注5：文化の大火、丙寅（へいいん、ひのえとら）の大火ともいう。



江戸名所図会

参考文献 『春日神社御由緒』

重陽の節句

9月9日

五節句のひとつ。9月9日は重陽ちょうようの節句で、菊の節句とも呼ばれ、邪氣はらを祓う菊を用いて祝う習わしがあった。

古来の中国では一から九の数字で、奇数は「陽」、偶数は「陰」と考えられていたため「陽」の最大の数字が重なる九月九日を「重陽」と名付け、吉日として不老長寿と子孫繁栄を願う日としていた。

重陽の節句が菊の節句とも呼ばれた理由は、中国に「菊が群生している谷の水を飲んでいた村民が長寿であった」との菊水伝説があり、菊は邪氣を祓い長寿の薬草と信じられていたからである。

なお、明治5年（1872）に太陰暦（旧暦）から太陽暦（新暦）に改暦したため、現在の9月9日には菊はまだ咲いていない。そのため、都内の菊花展^{注1}（湯島天神、亀戸天神、浅草寺等）は10月～11月に開催されている。

日本では、平安時代には宮中などで菊を鑑賞しながら菊酒^{注2}を飲み、菊花ぬぐに付いた朝露で肌を拭い、神前に菊花を供えるなどして厄払いを行っていた。京都の上賀茂神社かみがもでは重陽神事として、現在も当時の伝統を継承している。



菊花展

江戸時代には重陽の節句が江戸城中儀礼の一つとして式日（祝日）に定められた。その日は、将軍から大名たちに菊酒が振る舞われ、大名たちは綸子りんずや羽二重はふたえなどの織物、紅白の丸餅、新鮮な鯛や干物の鯛などを将軍に献上した。

江戸府内唯一の春日社として将軍家からの信奉あつが篤かった春日明神（三田春日神社）の9月9日の例大祭は「重陽の節句」で大いに賑わった。しかし、現在は「重陽の節句」に関連する行事は行われなくなり、例大祭の日も9月9日に近い金、土、日曜日に変更されている。都内では浅草神社あさくさなど数社が9月9日限定の「重陽の節句」の御朱印を授けるのみで、特別な行事は行われていない。

これは、他の節句ほど庶民に広まらなかったのが理由と考えられる^{注3}。

注1：古くは「菊合」という名前の菊花のコンクールが存在した。大正時代には、芝公園苔香園、麻布笑花園かえん（広尾）などで菊花展が開催されていた。

注2：本来は菊を酒に漬けて作るが、菊を浮かべた酒をさすこともある。

注3：民俗学者の柳田國男によると、日々の生活は、儀礼や祭、年中行事などを行う「非日常（ハレ）」の時と、それ以外の「日常（ケ）」の時がある。重陽の節句は、稲の収穫を控えて、慎んで暮らす「日常」の時期であったので、庶民には広がらなかったと考えられている。また、明治以降に衰退したのは、前述のように、新暦になって菊の開花の時期と合わなくなったためといわれる。

9月

ながつき

長月

元神明宮（天祖神社） 例大祭

9月16日前後

元神明宮では、毎年9月16日前後に氏子や地域の人々の健康と幸福を祈願して例大祭が斎行される。

本祭は隔年で行われる。本祭では神殿前で神職によって神輿に御霊入が行われ、高張提灯、神主、鳶の木遣り、宮神輿、子ども神輿、子ども山車の順で、三田一丁目町内を含む氏子地域を渡御する。神輿の担ぎ手は約80人である。

また、町内にあるオーストラリア大使館も門前に御旅所^{おたびしょ}^{注1}を設けて、自国のジュースを差し入れ、祭りの参加者と大使と一緒に写真に納まるなど、国際交流に一役買っている。

なお、本祭りの翌年の陰祭りでは神輿の渡御はないが、町会役員が中心となり、出店を出して地域住民の交流の場としている。

元神明宮の正式名称は神明宮で、江戸時代までは小山神明宮とも呼ばれた。

ご祭神は天照皇大御神で、相殿^{あいどの}^{注2}は水天宮である。

元神明宮は平安時代の寛弘2年（1005）、一条天皇の勅命により創建された。

平安時代以降は、渡辺綱^{わたなべのつな}^{注3}の産土神^{うぶすながみ}^{注4}ともいわれ、多くの武士に崇められた。

元神明宮のホームページによると、徳川家の命により神宝と御神体を飯倉神明（現在の芝大神宮）に移される際、氏子と崇敬者が「御神体だけは渡せない」と昼夜警護して守ったとの逸話が伝わっている。

なお、それ以降、当社を元神明宮、芝大神宮を芝神明宮と呼ぶようになった^{注5}。

また、元神明宮には、安産の神、水の神として崇拝されている水天宮も祀られている。これは隣接する有馬藩邸内に久留米水天宮から分祀された水天宮があったため、明治4年（1871）に有馬邸が青山に移転する際^{注6}、元神明宮に分霊を奉斎^{ほうさい}^{注7}したためである。

神明の名称は伊勢神宮を名乗るのと同じで畏れ多いとの理由から、明治2年（1869）に政府から天祖神社との社号が定められた。元神明宮が天祖神社とも呼ばれるのは、明治4年（1871）に太政官布告の社格制度により「宮」の称号使用を禁じられたためである。



元神明宮の例大祭

しかし、現在、神社庁の資料によると神明宮〔元神明〕と記載されている。

関東大震災や東京大空襲の被害も免れたため、厄除けの神としての崇敬も集めている。

元神明宮は、他の神社と共通の悩みを抱えている。現在、祭りは主に三田一丁目町会で支えているが、町会役員の高齢化、高層マンション等の新しい住民の地域社会への関心の低さが、この先の祭りの継続に不安を投げかけている。さらに、この地域では大規模再開発が計画されており、地元の住民が減り、他所からの転入者が増えていくことになる。

住民が、住んでいる地域にどれだけ関心と愛着を持つかによって、今後の祭りの将来が掛かっている。

是非、住民には住んでいる地域社会に関心を持っていただき、その行事に積極的に参加してほしい。



江戸名所図会に着色

注1：神社の祭礼において、神様が巡幸の途中で休憩、宿泊する場所。

注2：同じ社殿に二柱以上の神を合わせて祀ること。

注3：源頼光の家臣で、頼光四天王の一人。数々の鬼退治で知られる勇猛な武将。三田周辺は嵯峨源氏渡辺一党の領地だったといわれ、渡辺綱の生誕もこの地であったとの伝説がある。綱坂、綱の手引き坂も渡辺綱が由来となっている。

注4：その人の生まれた土地を守る神。他所に移住しても一生涯守ってくれる。

注5：こうした伝承から、芝大神宮の元の場所と紹介されることがあるが、『江戸名所図会』では明確に否定されており、あくまでも別の神社と記載されている。

注6：翌年に有馬邸と水天宮は日本橋^{かきがらちょう}蛸殻町へ移転した。

注7：神仏を^{つし}謹んで祀ること。

9月

ながつき

長月

だらだら祭 芝大神宮

9月11日～21日

芝大神宮のだらだら祭は五穀豊穰や国民の繁栄を祈り、執り行われる秋の大祭をいう。

11日間も続く長い祭りであるので、「だらだら祭」と呼ばれている。長い祭りである理由は、秋の収穫と時期が重なるので、多くの人が参詣できるようにと、祭礼期間を少しずつ延ばしていったことによる。

例大祭では、隔年で本祭りが執り行われ、中日の土、日曜日には、氏子町内会の20基近くの神輿の連合渡御が行われ、神社界隈を巡幸する。なお、不定期ではあるが、本社神輿が巡幸する年もある（直近では平成30年）。

神輿は浜松駅周辺の汐留通りに集結する。触れ太鼓を先頭に社名旗、め組頭連中、宮司、巫女、総代等の列、次に魁の芝大門一丁目宮本町会の神輿が続き、順次、大門通りに向けて巡幸する。大門の前では奉納太鼓である「千成太鼓」が勇壮で力強い音を響かせ、各町会神輿を迎える。

また、社殿前広場では、氏子の女性たちによる伊勢音頭が奉納される。



芝大神宮だらだら祭の御輿



伊勢音頭



千成太鼓

祭礼期間中は、社殿前広場に本社神輿と、め組の喧嘩^{注1}で鳴らされた半鐘^{はんしょう}が公開されている。

過去には、この祭り期間中には生姜市が立ったが、神社の生姜^{しょうが}を食せば風邪をひかないといわれて大変売れたそうである。生姜市の起源は定かではないが、神宮創建当時の寛弘2年(1005)、周辺は生姜畑だったため、祭礼の時に生姜市が立ったと伝わっている。江戸から明治時代までは、参道の両側に生姜

の店がずらりと並び、江戸の名残りを伝えていたが、現在では生姜市は立っておらず、芝大神宮が毎月一日に神前に献じられた御膳生ごぜん姜わを頒けている。

江戸時代の『江戸名所図会・飯倉神明祭礼』にはその賑わいが描かれている。『江戸自慢三十六興』では二人の町娘が描かれており、一人は千木管ちぎばこ^{注3}を持っている。



江戸名所図会

芝大神宮は天照大御神あまてらすおおみかみと豊受大神とようけのおおみかみの二柱が祭神で、江戸時代は関東のお伊勢様とよばれて大いに賑わった。また、明治5年（1872）までは芝神明といい、この芝神明に参拝すれば、伊勢神宮に参拝するのと同じご利益があるとして庶民の信仰を集めた。

今でも祭りの日は、浜松町、大門周辺はお祭り一色となり、多くの人が楽しんでいる。江戸時代から庶民の楽しみであった祭りが、今でもしっかりと引き継がれていることを感じた。



江戸自慢三十六興



生姜

注1：1805年2月に勸進相撲の木戸銭かんじん きどせんを払う払わないが発端で、め組の辰五郎を含む町火消と力士が喧嘩となった。火消側が非常時以外に使用されることが禁止されていた半鐘を私闘で鳴らした事が厳しく問われ、関係者が処分を受けた。その際に半鐘も「鳴り出した鐘が悪い」として遠島になったが、明治時代になって芝大神宮に戻された。なお、この話を元に歌舞伎「神明恵和合取組」が作られた。

注2：生姜にはジンゲロール、ジンゲロン、ショウガオールが含まれており、これが風邪等に効くとい

われている。また、江戸時代に由比正雪が幕府転覆をはかり玉川上水に毒を流したが、その上流で老婆が生姜を洗っていた為に毒が消され、江戸の人々が助かったとの伝説がある。

注3：曲物の小櫃をかたどった箱で、千木の余材で作ったため、その名がついたという説がある。「千着ちぎ」に通じるとして、着物が増えるのを願って女性たちが筆筒たんすに入れたといわれている。



半鐘



千木箱

参考文献 『神明暦』 芝大神宮

■ 芝神明宮周辺

芝神明宮周辺は江戸の初期より盛り場の様相を帯びていた。神明宮の境内では見世物小屋や相撲、大道芸人、寺社で行われる大衆演劇の宮地芝居、矢を射る楊弓場、宝くじである富籤とみくじの興行、茶屋等があった。

近くには、有名な絵双紙屋が並び、大衆向けの絵入り小説である草双紙、風俗画である浮世絵、木版多色刷りの錦絵が売られていた。参勤交代で国元に帰る武士たちや旅人が江戸土産にこれらを購入した。

また、玩具屋も多く、子どもたちにとっても魅力ある場所であった。



東海道名所図会

9月

ながつき

長月

月見

9月中旬(旧暦8月15日)

旧暦8月15日（現在の9月中旬）の満月は一年で最も明るく美しい。月（主に満月）を楽しむ風習は中国から伝わった。奈良・平安時代の宮中では、月を眺め、和歌を詠み、音楽を奏で楽しんだ。西行^{注1}の歌にも「秋はただ 今宵一夜の 名なりけり 同じ雲居に 月はずめども」と仲秋の名月の美しさを詠っている。

江戸時代になり社会が安定すると月見が庶民にも広がり、五穀豊穡を祝う祭りとなった。

月は、新月、半月（上弦）、満月、半月（下弦）などの呼び方があるが、それ以外にも様々な呼び方がある。

その姿によって、三日月、上弦の月、十三夜、十五夜、十六夜、立待月、居待月、寝待月、下弦の月、弓張月等と呼ばれる。

また、見える時間帯によって、夕月、宵待月、有明月等とも呼ばれる。

1日目	2日目	3日目	4日目	5日目	6日目	7日目	8日目	9日目
新月	三日月	上弦月	半月	下弦月	残月	新月	三日月	上弦月
			上弦の月 弓張り月	半月	下弦の月 弓張り月			
10日目	11日目	12日目	13日目	14日目	15日目	16日目	17日目	18日目
満月	満月	満月	満月	満月	満月	満月	満月	満月
十六夜	十五夜	十四夜	十三夜	十二夜	十一夜	十夜	九夜	八夜
							下弦の月	三日月

月の呼び方

八月十五夜の「仲秋の名月」の月見は、全国的に行われていた。特に江戸の人々は、前日の十四日は「待宵」「小望月」と呼び、翌日の十六日は「十六夜」と呼び、三日続きで月見を楽しんだ。

江戸時代の月の名所としては、愛宕山、湯島天神、九段坂などの高所、芝浦や品川などの海浜が知られていた。秋の夜空には、夏のにぶい光り方とは違う冴えた月が輝いていた。

三田四丁目の^{しょうごんじ}荘厳寺では、^{ちょうぼう}門前からの眺望が絶景のため、ここから大名が月を眺めたといわれている。

平成7年（1995）に再鑄造した600貫（2.3トン）の大^{ぼんしょう}梵鐘は、古くから伝わる地名（月の岬）と梵鐘の大きさから^{げっこうたろう}「月岬太郎」と命名されている。



荘厳寺の月岬太郎

『江戸府内絵本風俗往来』には「十五夜の観月は 明夜の陰晴はかられざるより 十四夜の夜月見の宴を開き 詩歌連俳を催すあり 扱又市中おしなべて団子を製して月に供ふ 柿 栗 葡萄 枝豆 里芋

を三方盆にうず高く盛あげたり 団子は大きさ^{わたり}径三寸五分位（約 11 cm）より小さきは二寸余（約 6 cm）とす」とある。なお、団子も里芋も満月の月を見立てたものである^{注2}。

江戸では花瓶に^{すすき}芒の穂も供えるが、京坂（京都、大坂）では芒も花も供えない。また、秋の七草「^{ききょう}桔梗、^{なでしこ}萩、^{ふじばかま}撫子、^{くず}芒、^{おみなえし}藤袴、葛、女郎花」を藪に見立てて供える地域もある。

団子の形は江戸では真ん丸、京坂では先を尖らせた小芋の形にする。その数は、江戸では十五夜は 15 個、十三夜は 13 個だが、これも地域によって異なっていた。

里芋については「きぬかつぎ」^{注3}や「にころばし」^{注4}などの料理を楽しんだ。

芋に関しては『東都歳事記』に「中古迄は麻布六本木芋洗坂に青物屋ありて、八月十五夜の前に市立て芋を^{おびだし}商ふ事夥かりし故、芋あらひ坂とよひける」とある。

また、九月十三夜（現在の 10 月中旬）にも同じように晩秋の月見をしていた。

なお、八月十五夜と九月十三夜のどちらか一方だけ月見をすることは、片月見といい野暮とされた。



江戸名所図会 高輪の月見

^{注1}：平安時代末期の歌人であり僧侶（1118～90）。

^{注2}：十五夜と十三夜だけは他人の畑のものを盗んでも構わないとされ、盗んだものを食べると健康になるといわれ、盗まれた方は縁起が良いとされた。

^{注3}：小芋を皮のまま蒸し、その皮をむいて食べる。

^{注4}：焦げつかないように転がしながら、煮汁がなくなるまで煮詰めた料理。

9月

ながつき

長月

出世の石段祭（隔年） 愛宕神社

9月22日～24日

愛宕神社では、一年の感謝を氏子、崇敬者と共に捧げる大祭式を毎年9月24日に執り行う。この大祭式では、装束を着けた神職によって儀式が厳かに執り行われる。

また出世の石段祭が、隔年の9月22日から24日に執り行われ、神輿が町内を巡幸する。神輿は宮司からお祓いを受けた後、段上から覗き込むだけでも足がすくむ急勾配の石段を、これ以上ない緊張感を伴い下りていく。少しでもバランスを崩せば、そのまま転げ落ちそうな急勾配の石段を下りる神輿の姿は極めてスリリングで、この祭りの一番の見所でもある。そして、無事に神輿を降ろした担ぎ手の手締めにより、この緊張が解かれる。大役を果たした担ぎ手に対して、見物人からも惜しめない拍手が送られる。



愛宕神社の神輿

その後、神輿は氏子の地域を巡幸する。

愛宕神社は江戸時代から有名な神社で、この芝の歳時記にも「強飯式」「ほおづき市」「人日の節句」などを取り上げているが、出世の石段祭りは、神社で一番大きなお祭りとしてされている。



東錦浮世稿談

愛宕神社は徳川家康の命により慶長8年（1603）に創建され、防火の神様として祀られた。その際に家康は信仰していた勝軍地蔵菩薩を勧請^{注1}している。主祭神は、火の神である火産靈命である。

なお、愛宕信仰は、京都の愛宕山山頂に鎮座する愛宕神社から発祥した防火の神に対する信仰である。愛宕神社または愛宕社は全国に約900社あるといわれている。

寛永11年（1634）、曲垣平九郎が三代将軍家光の命で、愛宕山の男坂を馬で上り、梅の枝を手折って馬で下りてきた。このことにより曲垣平九郎の名声が全国に広まったとの話がある。以降、この男坂は「出世の石段」と呼

ばれるようになった。この話は講談「寛永三馬術」としても有名である。その後、明治15年（1882）に石川清馬^{注2}、大正14年（1925）に岩木利夫^{注3}、昭和57年（1982）に渡辺隆馬^{注4}の3名が男坂を馬で上り下りすることに成功している。

注1：神仏の分霊を譲り受けお祀りすること。

注2：元仙台藩の馬術指南師で挑戦当時は曲馬師。この成功により徳川慶喜から葵の紋の使用を認められた。

注3：軍人で、引退する愛馬の最後の晴れ舞台として挑戦した。この時の様子が、その8か月前に放送を始めたばかりの東京放送局（現NHK）でラジオ中継された。これが日本で初めての生中継といわれている。ちなみに上るのは1分だったが、下りは45分も掛かっている。

注4：テレビ番組で挑戦したスタントマン。



愛宕神社の神輿

大祭式（金刀比羅宮）

10月10日

金刀比羅宮では毎月10日は月次祭^{つきなみさい}、特に10月10日には大祭式^{たいさいしき}が執り行われる。前日の9日は大祭式前日祭が行われ、両日とも神楽殿にて里神楽^{さとかがら}が奉納される。

大祭式は、正服^{せいふく}で宮司以下の神職が大鳥居から社殿に向かい、式典が執り行われる。

式典中に社殿では、浦安の舞^{注1}が奉納される。浦安の舞は伶人^{れいじん}^{注2}の歌に合わせ、二人の舞姫によって舞われる。使われる楽器は竜笛^{りゅうてき}、篳篥^{ひちりき}、笙^{しょう}、太鼓である。

神楽殿では、相模流萩原由郎社中の里神楽が神様に奉納される。



正服で社殿に向かう神職

また、境内では、おかめ、ひょっとこ踊りなど軽妙^{しゃだつ}洒脱^{みんよう}で縁起の良い民踊行列^{注3}が練り歩き、大祭を盛り上げる。

大祭の日は参詣者も多く、里神楽、民踊行列を楽しんでいる。

古式ゆかしき神事に親しむことは、忙しい日々を過ごしている現代人にとって、一服の清涼剤となり、癒しのひと時になるのではないか。

注1：昭和8年（1933）の昭和天皇御製の「天地の^{あめつち}神にぞ祈る 朝なぎの海のごとくに 波たたぬ世を」の和歌に作曲作舞した神楽舞。

注2：雅楽を演奏する人。

注3：民衆の間で伝承されてきた踊り。



民踊行列

七五三とは、七歳、五歳、三歳の子どもの成長を祝う行事であり、平安時代の公家社会で行われていた儀式が起源といわれている。

なお、「七五三」という言葉が使われるようになったのは明治時代になってからである。

三歳の男女は「髪置かみおきの儀」を行い、髪を伸ばし始める。五歳の男子は「袴着はかまぎの儀」を行い、袴を着用する。七歳の女子は、付け紐を解いて帯を締める「帯解おびときの儀」を行う。「帯解おびときの儀」には魂を内にしっかりと留めて生きていけるようにとの願いが込められている。

江戸時代までは七歳までの死亡率が高かったため、「七歳までは神の内」という言葉があった。七歳を超えるとひとまず安心ということで、正式に神社の氏子の仲間入りをした。親や周囲の人々は、子どもが無事成長したことを祝福するとともに、今後の成長を氏神様に祈った。江戸時代になって、これらの儀式は武家社会から商家、町民へと広まっていった。

七五三が11月15日に行われる理由は、江戸時代に五代将軍綱吉の子である徳松の髪置を行ったのが天和元年（1681）のこの日だったからといわれている^{注1}。

また、「千歳飴」が宮参りのお土産みやげとして売られたのも江戸時代からである^{注2}。千歳飴には、その長さには長寿の願いが、紅白の色には縁起の良さが込められている。さらに当時貴重だった砂糖を使った高価な飴は、めでたい行事にふさわ相応しいと考えられた。なお、千歳飴には、現在でも直径15mm以内、長さ1m以内という決まりがある。



七五三

港区での七五三の賑わいは、『増補 江戸年中行事』に「子供髪置 はかま着 帯解の祝ひ、諸所氏神へ参詣有 とりわき……芝神明……等は参詣多し」との記述がある。また、『江戸砂子』^{注3}には「芝神明宮 赤坂氷川社 分て多し 何れも今日神楽ありて賑わへり」と記述されている。

従来は数え年で七五三を祝ったが、現在では満年齢で祝う家庭がほとんどである。

芝地域では、愛宕神社、芝大神宮を始め各神社で、11月15日前後には子どもたちの元気な声が聞こえてくる。

注1：他の説としては「中国の暦の11月15日は鬼宿日（鬼の休む日）で、万事を進めるのに最良の日」「農村では11月の最初の満月の日の15日は収穫祭」「七五三の数字を足すと十五になる」などがある。

注2：「元禄の頃、浅草で飴売りの七兵衛が、紅白の棒状の飴をちとせあめ じゆみょうとうと名付けて長い袋に入れて売り歩いた」「1615年に大坂の平野甚左衛門が江戸に出て売り始めた」の二つの説がある。

注3：江戸中期に俳人菊岡沾涼 せんりょうが著した江戸の地誌。



七五三



七五三祝ひの図 歌川豊国

紅葉狩り

11月下旬～12月上旬

紅葉狩りは紅葉を見物する行楽をいう。紅葉こうようと聞くと、赤く色づいた楓かえでを思い浮かべるが、黄葉こうようする落葉樹も含まれる。

「狩り」には、尋ね探して「集める」だけではなく「愛でる」(鑑賞する)という意味もあるため、紅葉狩りと呼ばれる。

紅葉狩りの歴史は古く、平安時代には貴族が紅葉を愛でながら、宴うたげを開いていたといわれている。源氏物語第七帖『紅葉賀』には、紅葉の下で藤壺の懐妊を祝う宴が書かれている。しかし、当時の貴族の邸宅内には紅葉する樹木はなく、山に自生しているだけであったため、移動の煩わしさから盛んにはならなかった。

安土桃山時代、豊臣秀吉は晩年に醍醐寺だいごじでの春の花見に続き、秋の紅葉狩りを楽しみにしていたが、その前に亡くなり願いは叶かなわなかった。

江戸時代の中期以降、富裕な商人が誕生し、華やかな町民文化が花開いた。この商人たちが、秋の季節に紅葉の木の下で幕を張り、弁当、お酒を持ち込んで、賑やかに騒いで楽しみ、「紅葉狩り」は「花見」に並ぶ行楽として大流行した。



旧台徳院靈廟惣門



ヌルデ

江戸時代の紅葉の名所としては、下谷しよたうじの正燈寺、品川かいあんじの海晏寺が有名であった。酔客が両寺の紅葉を悪戯いたづらして枯らしたり、紅葉狩りを口実に「北の吉原遊郭」や「南の品川遊里」に出かけたりと芳かんばしくない行いも散見されたそうだ。これは当時の川柳にも「南にも北にもうその 紅葉あり」と詠まれている。なお、幕末から明治にかけては、滝野川、飛鳥山も紅葉の名所となった。

港区においては、文化文政期(1804～30)に書かれた『遊歴雑記』(十方庵大浄敬順 著)に「東
武芝赤羽根 有馬家北通用門まへ物揚場の際より西の方 中の橋の際まで土手通 数百株の
備^{ぬるで}^{注1}を植えて秋の頃は諸木に先立ちて紅葉す」
との記述がある。

また、『東都歳事記』には「溜池の洲 三田
小山ノ坂の辺 楓に先だちて白膠木が紅葉す
一時の壮观なり」との記述がある。さらに、「増
上寺弁天池^{あたり}辺も紅葉の見所である」と記されて
いる。

芝地域でも、江戸時代とは相当に景観も変わ
り当時の面影を偲ぶことは難しいが、旧芝離宮
恩賜庭園では当時と変わらない紅葉を楽しむこ
とができる。

また、大規模開発地域の公園緑地には楓など
が植栽され、紅葉を楽しむことができる。

しかし、紅葉の下で宴を楽しむことは「夢の
また夢」になってしまった。



芝公園

注1：ウルシ科ヌルデ属の落葉高木。ウル
シほどではないが、かぶれることもある。
幹を傷つけて白い汁を採取し塗料としたこ
とで、この名前が付いた。



弁天池

江戸の年末風物詩の代表は、11月の酉とりの市と12月の歳の市である。

酉の市は、港区では麻布十番稲荷で開催されているが、芝地域では開催されていない。

歳の市は万治年間（1658～61）頃、浅草で開催されたのが最初といわれている。歳の市ではしめ縄注1、しめ飾り注2、神棚、羽子板、正月用品、その他台所用品や生活雑貨全般が売られていた。江戸の主な歳の市は、14、15日の深川八幡、17、18日の浅草観音、20、21日の神田明神、22、23日の芝神明、24日の芝愛宕社下で開かれていた。

当時は、江戸市中の町角で鳶とびが辻々に小屋を作り、20日前後から大晦日夜半までしめ飾りを商っていた。

芝地域の浜松町一丁目で「め組」の法被はっぴを粋に着こなして、会社帰りの女性にしめ飾りを販売していた清宮さんにお話を伺った。

清宮さんの家は、明治の終わり頃、ひいおじいさんの代から商売をしており、清宮さんで



しめ縄売り

四代目に当たるとのこと。今は浜松町一丁目周辺一帯（旧新銭座町）が主で、新橋から金杉までも販売地域としている。また、増上寺、東京プリンスホテル、世界貿易センタービルディングなどにも、しめ飾りや門松注3を納入している。

藁わらは国産品を使用し、神垂しで注4にはコピー用紙を使う業者が多い中、和紙を一年前から折って型を崩さないように保存しておくなどのこだわりを持っている。

毎年12月23日から30日まで店を出しているが、近年は常連客が少なくなり、新しいお客さんとの割合は半々となっているそうである。

また、「日本人が昔から守ってきたしきたりや伝承は信仰に根差しているものが多いが、近頃はそれが分からなくなっていないか」とのお話もあった。

近年、正月飾りはデパート、スーパー等でも販売されているが、後継者不足と相まって同業者は減少傾向にあるとのこと。なお、烏森神社でも「め組」の人が正月飾りの販売をしている。

しめ縄、しめ飾り、お供飾り注5は正月風景いろどを彩る大切な風習である。いつまでも芝地域でこの風景を見ることが出来ればと思う。

注1：しめ縄は神様が宿る場所に飾り、不浄なものや災いが入り込まないように結界を張る目的がある。

注2：しめ縄に縁起物の飾りをつけたのが始まり。12月28日までに玄関に飾る。八は、末広がり「八」があり縁起が良い。29日は苦が待つ（末）。31日は、一夜飾りとなり神様に失礼にあたる。28日までに準備が整わなかった場合には、30日に飾る。

注3：歳神様に迷わず家に来て頂くための目印。

注4：しめ縄や玉串などに付けられる稲妻のような形の垂らした紙。

注5：鏡餅を縁起物で飾ったお供えもの。

- ・扇は末広がりを表し、子孫が繁栄するように。
- ・伊勢海老は海老のように腰が曲がるほどの長寿であるように。
- ・ホンダワラ（神馬藻）は海藻の一種で子孫繁栄を意味している。
- ・譲葉ゆずりはは新しい葉が出たら古い葉が落ちるため、子孫が途絶えることのないように。また、お互いに譲り合うことで円満を保つように。
- ・橙は子々孫々、代々家が続き繁栄するように。
- ・裏白はともに白髪になるまで夫婦が円満で長寿であるように。また、葉裏が白いことから、心や行いがきれいであるように。
- ・その他、昆布、水引などの縁起物も一緒に飾られる。



お供え飾り



しめ縄



門松



お供え飾り

年越の祓

12月晦日

大祓は、身体おほはらいの穢れけがを祓うための禊みそぎの行事で、6月晦日と12月晦日に行われている。

12月の大祓は「年越の祓」といい、新たな年を迎えるために心身を清める祓で、健康と厄除けの祈願をする。これは人間は生きていない内に罪を犯し、穢れけがが付くと考えられていたからである。

本来、穢れを祓うためには、海水に浸ったり、水を浴びて心身を清める。しかし、平安時代には、紙で「形代かたしろ」を作り、「形代」の身なを撫でて息を吹きかけて、穢れを「形代」に移した後に水に流す（または神社に奉納する）方法に変わっていった。

かつて、大祓という年中行事は、朝廷で恒例として6月と12月の晦日に行われていたが、大きな祭儀きょうじや凶事注1があると、臨時もよおに催されることもあった。

大祓の歴史は古く、大宝元年(701)の『大宝律令』によって正式な宮中の年中行事になるが、応仁の乱(1467～77)を最後に中断された。

夏越の祓は「夏越神事」「六月大祓」と呼ばれ、『江戸府内絵本風俗往来』によると芝神明宮で行われていたと記されているが、「年越の祓」についてはほとんど記録が残っていない。

明治5年(1872)の太政官布告により約400年ぶりに年越の祓が復活した。現在、芝地域の各神社でも年越の祓が執り行われている。

このように、大祓は長い中断があったが、きわめて古くから現在まで引き継がれた歴史のある貴重な年中行事である。

注1：未曾有の疫病、災害など。平成23年(2011)に東日本大震災が起こった年には、被災地の各神社で大祓が行われた。



形代

除夜の鐘

12月31日

大晦日は旧年と新年の区切りの日である。

その夜を「除夜」「年越し」といい、新年の神様である年神様を寝ずにお迎えする日といわれている。

江戸時代までは日が暮れるまでを1日としていた^{注1}。そのため大晦日の日が暮れるとともに新年になると考えられていたことから、「除夜の鐘つき」は新年の行事の一部とされていた。

現在は、神社では夜を徹して神主が^{おほらい}大祓を行い、寺院では午前零時をはさんで除夜の鐘を百八回鳴らす。

百八回の理由は人々は百八の^{ぼんのう}煩惱^{注2}を持ち、それを払うために百八回の鐘を^つ撞いたからといわれている。

また、中国の宋時代に、十二ヶ月と二十四節気と七十二候（五日を一候とした昔の暦）を合わせた数が百八になるため、その数を撞いたとの説もある。

現在、芝地域では^{せいしょうじ}増上寺、青松寺などの寺院で除夜の鐘が撞かれている。

本来、煩惱は仏教の修行を積むことでしか払うことが出来ないといわれるが、修行を積んでいない私たちは、煩惱を払うことを願い除夜の鐘を撞く。



増上寺の除夜の鐘撞き

注1：契約や公的行事などは、現在と同様に午前零時で日付が変わると考えられていた。

注2：心身にまとい付き、心をかき乱す一切の^{もうねん}妄念や欲望。一般的には百八あるといわれている。

参考文献

- | | | |
|-----------------|--------------|-------------|
| 東都歳事記 | 齋藤 月岑 | 平凡社 |
| 東京名所図会 | 宮尾しげを 監修 | 睦書房 |
| 江戸府内絵本江戸風俗往来 | 菊池貴一郎 | 平凡社 |
| 江戸東京歳時記 | 長沢 利明 | 吉川弘文館 |
| 年中行事を「科学」する | 永田 久 | 日本経済新聞社 |
| 日本人のしきたり | 飯倉 晴武 | 青春出版社 |
| 浮世絵で見る年中行事 | 中村 祐子 | 山川出版社 |
| 港区歳時記一、二、三、四 | 三田図書館 編 | 東京都港区立三田図書館 |
| 図解 江戸の四季と暮らし | 河合 敦 監修 | 学習研究社 |
| 町屋と町人の暮らし | 平井 聖 | 学習研究社 |
| 江戸の日暦 | 岸井 良衛 | 実業之日本社 |
| 年中行事事典【改訂版】 | 田中 宣一 ほか編 | 三省堂 |
| 年中行事読本 | 岡田 芳朗 ほか | 創元社 |
| 神道史大辞典 | 藪田 稔 ほか編 | 吉川弘文館 |
| 港区文化財のしおり | | 港区教育委員会 |
| 江戸の歳事風俗誌 | 小野 武雄 | 展望社 |
| 日本の歳時伝承 | 小川 直之 | KADOKAWA |
| 江戸風物詩 | 川崎房五郎 | 桃源社 |
| 年中行事入門 | 一条 真也 | PHP 研究所 |
| 江戸ごよみ十二ヶ月 | 高橋 達郎 | 人文社 |
| 江戸博覧強記 | 江戸文化歴史検定協会 編 | 小学館 |
| 江戸の庶民信仰 | 山路 興造 | 青幻舎 |
| 東京年中行事 1、2 | 若月 紫蘭 | 平凡社 |
| 12ヶ月のしきたり | 新谷 尚紀 | PHP 研究所 |
| 江戸名所図会を読む | 川田 壽 | 東京堂出版 |
| 絵でつづるやさしい暮らし歳時記 | 新谷 尚紀 | 日本文芸社 |
| 江戸川柳夜語 | 田辺貞之助 | 潮文社 |
| 江戸歳時記 | 宮田 登 | 吉川弘文館 |
| 江戸っ子歳事記 | 鈴木 理生 | 三省堂 |
| 江戸時代 | 山本 博文 監修 | 小学館 |
| 一目でわかる江戸時代 | 竹内 誠 監修 | 小学館 |
| 武江年表 1、2 | 齋藤 月岑 | 平凡社 |
| 七福神の謎 77 | 武光 誠 | 祥伝社 |
| 桜が創った「日本」 | 佐藤 俊樹 | 岩波書店 |

岡本綺堂 江戸に就ての話	岸井 良衛 編	青蛙房
江戸あじわい図譜	高橋 幹夫	青蛙房
明治東京歳時記	槌田 満文 編	青蛙房
知っておきたい日本の年中行事事典	福田アジオ ほか	吉川弘文館
日本を楽しむ年中行事	三越 監修	かんき出版
二十四節気と七十二候の季節手帖	山下 景子	成美堂出版
江戸東京の庶民信仰	長沢 利明	講談社
年中行事覚書	柳田 國男	講談社
江戸年中行事	三田村鳶魚 編	中央公論新社
図解！江戸時代	「歴史ミステリー」倶楽部	三笠書房
鳩居堂の日本のしきたり豆知識	鳩居堂 監修	マガジンハウス
春夏秋冬を楽しむ 暮らし歳時記	生活たのしみ隊 編	成美堂出版
絵でみる江戸の町と暮らし図鑑	善養寺ススム	廣済堂出版
暮らしのならわし十二か月	白井 明大 ほか	飛鳥新社
大切にしたい、にっぽんの暮らし。	さとうひろみ	サンクチュアリ出版
図説 歴史散歩事典	佐藤 信 編	山川出版社
ぐるぐる七福神	中島たい子	幻冬舎
日本石仏事典	庚申懇話会 編	雄山閣
知っておきたい仏像と仏教	今井浄圓 ほか監修	宝島社
石仏入門	日下部朝一郎	国書刊行会
時と暦	青木 信仰	東京大学出版会
歳時の文化事典	五十嵐謙吉	八坂書房
都市の年中行事	石井 研士	春秋社
仏教年中行事	伊藤 唯真 編	名著出版
年中行事の歴史学	遠藤 元男 ほか編	弘文堂
疫神と福神	大島 建彦	三弥井書店
正月の来た道	大林 太良	小学館
念仏芸能と御霊信仰	大森 恵子	名著出版
年中行事と生活暦	倉石 忠彦	岩田書院
伝承歳時記	小池 淳一	飯塚書店
暮らしの中の民俗学＜2＞	新谷 尚紀 ほか編	吉川弘文館
盆行事の民俗学的研究	高谷 重夫	岩田書院
農村の年中行事	武田 久吉	有峰書店
年中行事の研究	田中 宣一	桜楓社
月ごとの祭	橋浦 泰雄	岩崎美術社
宗教 神祭	原田 敏明	岩田書院
江戸文化の見方	竹内 誠 編	角川学芸出版

江戸の暮らし	芳賀 登 編	柏書房
早わかり江戸時代	河合 敦	日本実業出版社
歳時習俗考	平山敏治郎	法政大学出版局
古代日本の四季ごよみ	藤井 一二	中央公論社
餅	藤田 秀司	秋田文化出版社
催事百話 ムラとイエの年中行事	宮田 登 ほか	ぎょうせい
歳時習俗語彙	柳田 國男 編	国書刊行会
日本の祭	柳田 國男	角川学芸出版
神ごとの中の日本人	和歌森太郎	弘文堂
日本歳時記	貝原 益軒 ほか	八坂書房
増補 俳諧歳時記栞草<上下>	曲亭 馬琴 編	岩波書店
五節句の話	有馬敏四郎	芸艸堂
暦の話	渡邊 敏夫	増進堂
江戸の日暦<上下>	岸井 良衛	実業之日本社
甲子夜話 1、2	松浦 静山	平凡社
江戸東京学事始め	小木 新造	筑摩書房
増補 港区近代沿革図集		港区教育委員会
○芝・三田・芝浦		
○新橋・愛宕・虎ノ門		
平成 18 年度特別展図録 UKIYO-E		港区立港郷土資料館
平成 23 年度特別展図録 愛宕山		港区立港郷土資料館
復元 江戸生活図鑑	笹間 良彦	柏書房
江戸事情第三卷政治社会編	NHK データ情報部 編	雄山閣
江戸時代図誌 江戸一、二、三	西山松之助 ほか編	筑摩書房
大江戸万華鏡	牧野 昇 ほか監修	農山漁村文化協会
江戸時代館	竹内 誠 監修	小学館
日本人なら身につけたい江戸の「粹」	植月 真澄	河出書房新社
江戸文化誌	西山松之助	岩波書店
江戸・東京 下町の歳時記	荒井 修	集英社
東京の中の江戸	長谷 章久	角川書店
写された港区 1、2、3、4	港区教育委員会 編	港区教育委員会
庶民信仰の幻想	圭室 文雄 ほか	毎日新聞社
百万都市 江戸の生活	北原 進	角川学芸出版
江戸庶民の四季	西山松之助	岩波書店
大江戸曼荼羅	朝日ジャーナル 編	朝日新聞社
江戸・もうひとつの風景	鈴木 一夫	読売新聞社
八百八町いきなりくり	北原 進	教育出版

日本の神々の事典	藪田 稔	ほか監修	学習研究社
日本の神道	津田左右吉		岩波書店
神社	岡田 米夫		東京堂出版
別冊太陽 日本の神	山折 哲雄	監修	平凡社
祭りの構造	倉林 正次		日本放送出版協会
古代の神社と祭り	三宅 和朗		吉川弘文館
神社 そのご利益と祭神	川口 謙二		東京美術
大江戸生活事情	石川 英輔		講談社
浮世絵に見る江戸の暮らし	橋本 澄子	ほか編	河出書房新社
お江戸あきない繁盛図鑑	竜野 努		アスペクト
江戸繁昌記	寺門 静軒		三崎書房
江戸の親子	太田 素子		中央公論社
大江戸の文化	西山松之助		NHK 出版
江戸の子どもたち	くもん子ども研究所	編	小学館
桜信仰と日本人	田中 秀明		青春出版社
東京時代	小木 新造		日本放送出版協会
江戸の道楽	棚橋 正博		講談社
江戸空間 100万都市の原景	石川 英輔		評論社
近世の流行神	宮田 登		評論社
江戸の暮らし 江戸に学ぶ「おとな」の粋	神崎 宣武		講談社
江戸時代の暮らし方	小沢詠美子		実業之日本社
お江戸の意外な生活事情	中江 克己		PHP 研究所
大江戸商売ばなし	興津 要		中央公論新社
大江戸長屋ばなし	興津 要		中央公論新社
江戸東京博物館	山本 博文		小学館
浮世絵	大久保純一		岩波書店
花の大江戸風俗案内	菊地ひと美		筑摩書房
日本人の葬儀	新谷 尚紀		紀伊国屋書店
江戸人のしきたり	北嶋 廣敏		幻冬舎
江戸の名所	田澤 拓也		小学館
江戸のはやり神	宮田 登		筑摩書房
日本の神々と仏	岩井 宏實		青春出版社
神社と神々	井上 順孝		実業之日本社
神と仏	山折 哲雄		講談社
すべては江戸時代に花咲いた	農山漁村文化協会	編	農山漁村文化協会
江戸 祭・縁日地図	江戸文化研究会	編	主婦と生活社
江戸庶民の楽しみ	青木宏一郎		中央公論新社

編集後記

「芝の歳時記」では以下の条件の年中行事を掲載している。

1. 芝地域で実施されている、あるいは実施されていた行事。なお芝地域とは愛宕、芝、芝公園、芝大門、新橋、虎ノ門、西新橋、浜松町、東新橋、海岸、三田の地域をいう。
2. 主に江戸時代に実施されていた行事。なお現在では実施されていない行事も対象とする。
3. 地域住民の生活と結びついている行事。
4. 各行事の掲載は新暦順。

なお、寺社についての記載は取材に基づいているため、用語の使い方などが違う場合もある。

3年間の構想と1年間の執筆期間を経て、「芝の歳時記」が完成しました。「芝の語り部」は13年の歴史があります。ツアーや講座を通じての知識の蓄積と、今回の歳時記のための取材や調査、さらに長時間の議論を重ねてでき上がったのが、この冊子です。

「芝の歳時記」が、一人でも多くの方に芝の魅力を感じて頂ける冊子となることを心より願っています。(位野花克自 吉川一郎)



芝の歳時記 編集委員

刊行物発行番号 31197-1235

芝の歳時記

令和2年(2020)3月

編集：芝会議 まちの魅力発掘部会 芝の語り部

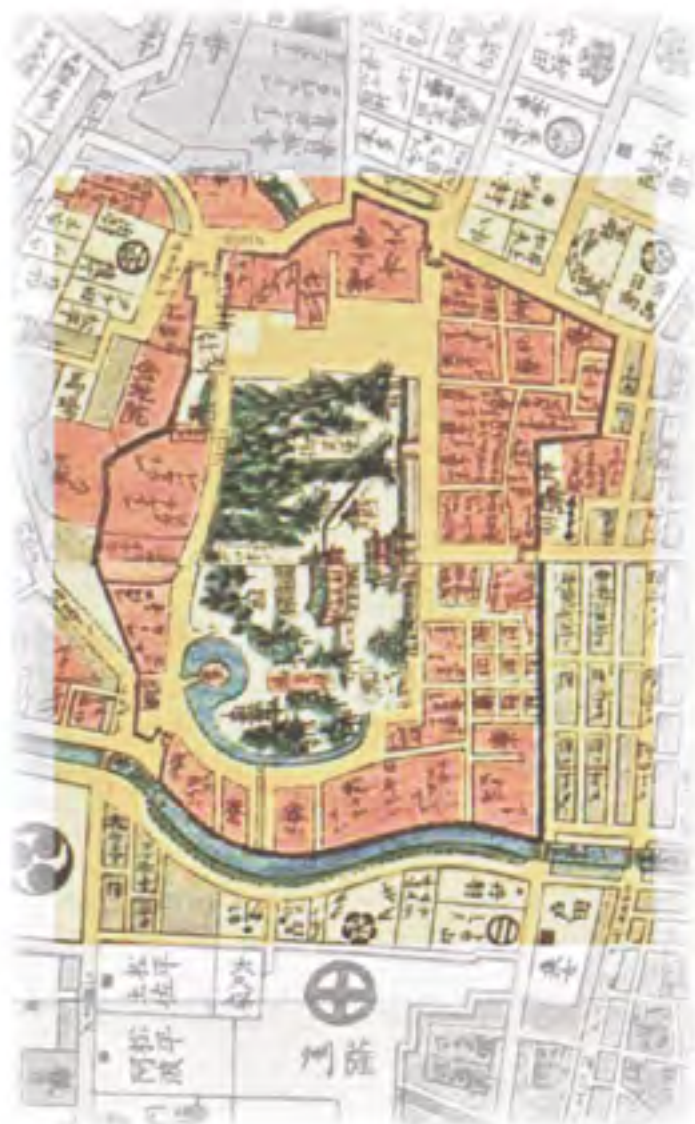
発行：港区芝地区総合支所 協働推進課

港区芝公園一丁目5番25号

電話 03-3578-3111 (代表)

<http://www.city.minato.tokyo.jp/>

無断転載禁止



港区芝地区総合支所協働推進課
芝会議まちの魅力発掘部会 芝の語り部